

昭和48年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告

No. II 社会体育の動機に関する調査
—第2報・面接調査—

財団法人 日本体育協会

スポーツ科学委員会

社会体育の動機に関する調査

—第2報・面接調査—

報 告 者

財)日本体育協会スポーツ科学委員会プロジェクトチーム—社会体育の動機に関する調査班—

調 枝 孝 治^{④)}・江 川 玖 成^{②)}・嘉 戸 脩^{③)}
青 山 昌 二^{①)}・落 合 優^{④)}

目 次

- I 人間行動の非合理性
- II 「健康」による動機づけ論理
- III 生物的生存欲求と文化的生存欲求の関係
- IV 社会人の運動・スポーツ欲求の構造
- V 社会体育がめざすもの
- VI 目 的
- VII 方 法
 - (1) 運動欲求にたいする調査項目
 - (2) 面接法
 - (3) 被面接者と面接期日
 - (4) 面接者
- VIII 結果と考察
 - (1) 被面接者の特性
 - (2) 運動欲求とコンフリクトの型
 - (3) 生物的生存欲求と非効用的生存欲求との関係
 - (4) コンフリクトの型と動機づけの主体的要因と客体的要因
 - (5) コンフリクト解決のためのモデル
- IX 要 約
- 参考文献

I. 人間行動の非合理性^{①)}

人間がよりよく生きていく上で、それらを積極的に行動として表現すれば、非常に価値のあることとして自他ともに認めているにもかかわらず、なかなか腰のあがらないものがある。

それらとは、直接人間の生命維持とかかわりの少ない学問や芸術などの創造的活動、遊びの性質(nature)が基底になっている運動・スポーツ活動、および好奇心や驚きといった情緒反応を人間

行動の自由度拡大のための主要な動因としている冒険行為などである。

さらに、少し観点は異なるが、同様に「やらないことのうしろめたさ」という心理的圧力を感じさせるものとして、日常レベルの保健・健康管理、福祉活動、地域住民のための自治活動などが考えられる。

これらのこととは、人間が、論理的に正しい行動であるにもかかわらず、何らかの心理・社会的要因により、容易に価値あることが実践できない非合理的行動を起す可能性を示唆する例である。

健康ながらだづくりを口では唱えながら、実際には、運動経験を少くし、深夜に及ぶ飲酒回数を多くしたり、発育・発達に適した栄養摂取の科学的知識を認識しているにもかかわらず、自分の嗜好によって人工的な食物を選択したりする。さらに、高度な管理社会で自己疎外の洗礼を受け、それを克服するために、自己創造の充実をスポーツ活動に求めることは、論理的行動としてなっとくできる。しかし、実際は「つきあい」のゴルフやマージャンという非合理的行動が支配的になる。

このような人間の非合理的行動の例は、日常的なもので、なにも目くじら立てて批難するほどのことでもあるまい。

ただ、これから問題にする「社会体育」を考えていく際に、人間の論理的行動と非合理的行動のギャップとか、それを“うめる”行動戦略を如何に導き出すかといった点をいやでも考えざるをえないということに注意を向ける必要がある。

II 「健康」による動機づけ論理

わが国の社会人に、人間の多様な欲求体系の中

1) 東京大学, 2) 東京教育大学, 3) 東京学芸大学, 4) 横浜国立大学

のひとつである身体活動欲求の享受をいかにすれば、可能にできるかの方略を明らかにする目的で、まず、社会人の運動やスポーツに関する動機について質問紙調査を行なった²⁾。

それらの結果を概測的に一般化すれば、次のようになるだろう。

(1)社会人全般にいえることは、運動・スポーツ経験が少なく、運動不足を感じている。

(2)運動・スポーツをやり始めた理由や現在やっている理由としては、「運動不足やストレスの解消のため」「健康・体力の保持・増進のため」「体を動かすことが好きだから」という一次的(生理的)欲求を代表的なものとして多数回答している。そして、自己実現的欲求に関連のある三次的欲求が次に多く、社会的欲求である二次的欲求は予想に反して少なかった。

(3)一方、運動・スポーツの効用(長所)として認められたものは、「精神的ストレスの解消」「健康や体力の保持・増進」「明朗」「自主性の養成」「自信・決断力の養成」「余暇の善用」「自己の能力発揮」「根情の養成」「成就欲求の充足」などであった。これらは主として、一次的欲求と三次的欲求であるが現実には、「会社の仕事が忙しい」「家事・育児が忙しい」といった理由で、運動・スポーツがもっている価値を、実践過程の中で十分に自己のものにしていないということが浮きぼりにされた。

つまり、運動・スポーツという文化的価値を認めながらも、実際行動では、実行がなく認知レベルと行動レベルにおいて、相当程度の不一致が見られ、この状況下にいる者は、何らかの人格的葛藤(personality conflict)を感じていると推察できる。

(4)学校時代、運動クラブに所属していた者の方が、社会人になってからの運動・スポーツ活動の実施状況が高いことがわかった。

このような結果は、これまで数多く試みられた同種の質問調査研究と基本的には変らず予期された内容である。

そこで、このような知見をもとに社会人の運動・スポーツ活動を如何に動機づけるかという動機づけの論理を導き出すとすれば、どのようなものが考えられるだろうか。安易で一般うけのするも

のは、次のようなものだろう。

「わが国の社会人は、会社の仕事や家事・育児などで、とても忙しい。そのため、著しい運動不足を招来している。運動不足は健康を阻害するので、健康保持のためには、是非とも運動・スポーツを実施する必要がある。社会人は、他にもいろいろな運動欲求をもっているが、何分にも忙しい。この状況で、彼らに運動習慣を形成させるには、人間の生存をおびやかす「運動不足」をいかに解消するかという生理的動因を動機づけの戦略として位置づけることが最適方略である。

そのためには、一人ひとりに適した運動量はどのくらいに決めるか、一人、一日最低どれだけの運動をすれば、健康維持が可能かといった具体的運動处方を早急に提示する必要がある……」といった論理である。しかし、このような因果論的接近法が、「社会体育」の問題解決に最も有効性を発揮するかというと、ことは、そう簡単でない。自然現象にしろ、社会現象にしろ、それらの問題解決には、「単純化をもとめそれを疑う³⁾」態度が要求される。

III. 生物的生存欲求と文化的生存欲求の関係

「社会体育」を有効にかつ充実したものにするために、人びとが、まず日常どのような運動・スポーツ欲求を潜在的に所有しているかを明らかにすることは大切なことである。

そして、明らかにされた運動欲求(しばしば表面的な場合が多いが)に対して、適切な運動行動のプログラムが用意され、各人の選択にゆだねられる。運動結果に対しては、専門的な立場から多種で個別的な処方が行なわれる。

このような一連のプロセスを社会的水準で経験しながら、各人の運動欲求を充足するシステムが要求されているのである。

いま、仮に、社会人の運動・スポーツ実践のための動機づけとして、健康の保持・増進といった生物学的(効用的、必要的)な生存欲求が、最も有効だとするとしよう。確かに、生物的適応のメカニズムを考えた場合、運動活動は生物の生存にとって必要な要素である。

われわれは、不幸にして病気になった人、幸いにして回復に向っている人たちがいかに自発的に運動欲求を口にし、運動経験をもとうと努力するかを経験的によく知っている。しかし、病気でない人たちの日常レベルではこの「必要なこと」は、よく理解されているのであるが、十分な行動始発の引き金にはならないこともまたよく知っている。それは何故だろうか。これらのことについて、少し考えてみることにする。

質問紙調査において、運動・スポーツをやり始めた理由として、生理的欲求と自己実現的欲求が多くあげられていた。一人のひとがある対象に対しても一つ動機は、必ずひとつの動機と決まっているものではなく、大部分の場合、いくつかの次元の異なった動機が相互に関連して流動的なのが普通である。たとえば、健康づくりのためにスポーツクラブに入り、自己のベストを尽したいという欲求を同時にもつてゐる。また、人間のもつ欲求には、低次なものから順次高次なものへと階層的な構造化が見られる。このことは、人間というものが、相対的段階的にしか、満足しないものであり、いろいろな欲求には常に一種の優先序列（一次欲求→二次欲求→三次欲求）のヒエラルキーが存在する事実を意味している⁴⁾。

これらの欲求に関する原則的観点から考えると、運動・スポーツは、まずストレスの解消とか健康の保持・増進のために始めることになるかもしれない。しかし、その運動・スポーツが終了した時点の満足感や充実感の主観点体験を個別的に意味づけることも事実である。その主観的に意味づけられた内容が、ややもすると自己実現的な三次欲求の表現をとる可能性は多分にあると思われる。

もし、このような図式が、運動経験のたびごとに強化されると仮定すると、そこで三次的欲求は、やがては運動・スポーツをするための最優先欲求に変化する機能をもつて至ることが予測できる。

「運動をした後はスカッとする」とか「運動をする人はサバサバした人が多い」とか「運動後に汗を流してサッパリする」とかいう言葉をよく耳にするが、これはどう意味か。

運動に限らず、人間の関与する行為は、やりっ

ぱなしで、その行為プロセスを後で秩序づける努力を放棄した場合、そこには脈絡のない不連続行為の分散があるだけで、とうてい質的に高い人間像は生じない。「運動後のスカットやサッパリ」の意味するところは、恐らく、彼らが遂行する運動過程が速く、秩序的思考をする時間的余裕がない（高度な運動では当然である）ことと、そこから得られる情報は、長期の記憶には非常に不利な運動筋肉感覚からのものであるため、運動終了時での情報の組織化が非常に困難なことに原因がある。それにしても、運動後の意味づけにおいて、表現能力の劣悪さはその運動がもつ魅力を極端に低下させ、次の運動実施の意欲に多大な影響を与えていていると思われる。

かつて、夏目漱石は自己の創作に関して、「午前中の創作の喜びが、午後の肉体の愉快となる⁵⁾」といったが、社会人がそれに対して「午前中の肉体の喜びが、午後の仕事の愉快になる」となればよいが、もちろん“仕事”の所へ“創作”“生活”“勉強”などの文句を入れることには一向さしつかえないことは、いうまでもない。

最初aであったものが機能変換をしてAになることはよくある。その心理的ダイナミックスの詳細はよくわからないが、人間の行動変様の基本的メカニズムがその中にあるといつてもよかろう。

われわれの生存においては、「必要ではないが、この上なく貴重なもの⁶⁾」がある。それは、この報告書の冒頭でもふれたとおり、生物学的必要を満たすものではなく、いわば、必要から解放された“非効用性”としての文化である。運動・スポーツに限っていえば、歴史的には、人間の生存欲求を充足させるものとして、その発生の基礎を必要な効用性に置いていたと考えられる。しかしながら、その生存欲求を追求する過程において、必要から解放された“遊び”としての身体活動が組織化され、現在のような運動・スポーツ文化財として機能している。そういう意味から、運動・スポーツは、ひとつの文化として、その非効用性（生きるために、ボール運動の技術を追求したり、ごひいきのチームを気持ちがいじみてまで応援することはない）をその固有の推進力として発展してきたのである⁷⁾。人々は、ある目的にしたがって、

多くの運動・スポーツを自己の責任において自由に選択することによって、その文化の享受を充足していると考えられる。

IV. 社会人の運動・スポーツ欲求の構造

社会人に対して、運動・スポーツの意見を聞いた人なら誰れでも出会うものに「必要だが、不十分である」という意見の圧倒的多数さである。この必要にして不十分ということを、どのように理解するかによって、社会人のための運動・スポーツ実践の動機づけとか運動処方は大きな影響を受けると考える。

まず、ひとつの理解は「生理的欲求を満足するには、運動・スポーツは必要であるが、現状では、いくつかの困難な状況があるため実施不可能である。そのため生理的欲求の充足は不十分である」というものである。他方の理解は、これに対して「生存にとって、直接的には必要ではないが、人間にとて貴重な運動・スポーツは必要である。しかし、現状では、いくつかの妨害条件のため、高次な自己実現的文化欲求は不十分にしか享受することができない」というように理解するものである。この2つの理解の仕方は、いわば、人間の生存様式における生物的適応（効用的、必要的、ホメオスタシス的平衡）を重視するのか、それとも、社会・文化的適応（非効用的、欲望的、非平衡の維持）を重視するかということを表わしているといえよう。

単純な2分類的思考形式は、人間の世界には非常に多く、実際には、あまり生産的な結果を導びくことが少いことはよく認められている。そのことを承知の上で続けると、病的カテゴリーに属さない、大部分の社会人においては、生物的適応よりも社会・文化的適応の方が、日常レベルにおいて、より優勢に行動をコントロールすると考えられる。つまり生理的必要が満されると、人間には新たな欲求と願望が生ずるのである。ルネ・デュボスが言うように「人間は文明に慣れ、とくに都会化するほど、生理学的な飢えに忠実に従った経験を忘れ、食べる楽しみに起因する非生物学的な必要を考えるようになる。この楽しみはすぐに、

そのもとになった生理学上の目的にとって代わって、ほんとうの目標になってしまう」⁸⁾。この考え方は、すべての人間の欲求体系の構造をささえている基本的考え方である。まず、「運動不足やストレス解消のため」に運動を始めて、そのうち、社会・文化的欲求である「美容のためや自己を知るため」に運動をする。そして、「高次な欲求の満足は低次の欲求の満足より自己実現に近い」という快欲求に支配されることになる。

社会人の運動欲求を生理的欲求のレベルの充足に置くか、それとも、自由で選択的な個人の特殊的社会・文化的欲求の充足に焦点を置くかは、この際十分吟味する必要がある。

V. 社会体育がめざすもの

これまで、述べてきたことから、社会人の運動・スポーツの活動欲求には、大きく分けて、生物学的生存欲求と社会・文化的生存欲求のあることがわかると思う。これら両者のどちらかを重点的にとりあげるか、それとも両者を階層的に位置づけ、すべての欲求を充足できるシステムを提示するかであるが、それはいうまでもなく後者が理想である。

しかし、現実には、このような両者の生存欲求を階層的にとらえ、人間の欲求体系の全体を判断の枠組としながら、運動・スポーツが考えられた例は少い。

そこで、この種のこれから研究のためにも、比較的ふれられていない点を指摘しながら人間の運動・スポーツ活動が、なぜ生物学的生存欲求の充足に向わなければならないかを述べることにする。そして、このような理論的仮定を前面に押し出すことによって、合理的行動（タテマエ的回答）から非合理的行動（ホンネ的回答）の力動性を面接法により明らかにしたい。（以下の問題点は、「社会体育の動機に関する調査第1報」の検討から導びかれたものである。）

(1)まず、社会人の運動不足感について考えてみる。われわれが、日常よく口にするこの運動不足感という表現内容は、検討を正確にすればするほど、すこぶるあいまいな場合が出てくる。

ある人は生活に困らない範囲で、最少エネルギー

一消費の法則を順守し、運動不足を口にする。また、ある人は、朝から晩まで休みなく位置変化をし、エネルギー消費はなはだしいにもかかわらず、同様に運動不足を口にするといった場合がある。前者の場合は、常識的には、その不足感を生理・物理的変化に原因を求めてよかろう。

しかし、後者の場合はどうだろう。一般にわれわれは、「不足」という言葉を使う場合は「勉強不足」とか「人生経験不足」といった具合に表現する。そして、その意味するところは、物理学にしろ、人生経験にしろ、要するに、単一経験の不足を嘆いて不足感を述べているのではないということである。

物理学者なら、物理学的知識をより富かにしたい欲求をもっている。しかし、それを可能にするには、生物学、化学、数学、工学などの多様な関連学問の知識を期待する。ここにおいて、当の物理学者をして、それらの関連学問の知識不足から、「私の物理学はまだ勉強不足だ」といわせる。つまり願望的勉強不足感なのである。

きまりきった人生にも、それなりの深さと意味はある。しかし、ある人に「人生経験不足」だといわせているのは、その人の生き方が他の多様な人生を参考にすることにより充実することを期待しているからである。この意味から人間の発展的姿をみた時、永遠に「不足感」はなくならないといえよう。

一日中労働をしている人が、「運動不足」を理由に昼休みにキャッチボールをする風景を見ることがある。彼らの運動不足感は、おそらく生活リズムの单调さ、仕事の内容の固定化から生ずるのであって、一日の運動量や強度は、健康的な生活を維持するには十分過ぎるほどである。

社会人の運動・スポーツに関する調査結果では、このような「運動不足感爱好者」がいるが、それを単純に「運動不足」→「健康づくりのための体力」と短絡することは一考を要する。もし、このような欲求次元の高い運動不足者に対して、現行のような体力テスト項目を処方すると、入会時300人が1週間で10人になるスポーツ・クラブが出現することが予想できる。

文部省スポーツテストのなかの体力診断テスト

は、反復横とび、握力、背筋力、垂直とび、伏臥上体そらし、立位体前屈、踏み台昇降運動の7種目である。体力テストで体力があるかないかを診断することそのものに文句はないのであるが、もし、体力がないと判定された人が、これら上記の能力をつけるために、連日進んで自発的にこれらの單一くりかえし運動を行なうだろうか。

よく「体力づくりは必要であるが、そのための運動は楽しくない」ということを聞く。これは、体力の項目として定められている運動が、単一運動のくりかえしであり、基本的には、運動をやるやり方の可能性の自由度が小さく、したがって、目的と手段の束縛条件が固定的であることに起因している。それにひきかえ、楽しい運動系列といわれるスポーツを考えて見ると、この運動系列は目的が明確で、それに至る手段は柔軟である。つまり、目的に到達する運動のやり方の自由度が大きく多様性がそこに要求されるものである。

また、現実行動の自由度の限界を、意識のレベルの自由度で補って、考える楽しみがある。変化を求める欲求が強い中高年者の体力づくりが、うまくいくためには、「運動しなければ生命があぶないですよ」といった、危機感にうたったえる戦略だけでは片手落の感があると思われるのであるが……。

現代の社会状況は、人間の生得的生物学的能力を減退させるものをもっていることは、たしかである。それと同時に、人間の欲求次元も複雑な内容をもっていると考えられる。

ここでふれた、文化的レベルの運動不足感だけなら、「必要最小限項目の運動」とか「必要最低限の運動量」といって、人間の運動欲求を画一化・縮少化する必要はないのだが。

(2)つぎに、社会人が運動・スポーツを行う理由として多く回答した体を動かすことが好きだからという問題である。

4日に一度の性的周期をもつ雌ネズミの一般活動性の増大を例にだすまでもなく、生活体が示す無方向的な活動形態を運動・スポーツを行う理由として上げる、わが国社会人の運動・スポーツに関する教養は押して知るべしである。そうはいっても、ただ何んとなく、自分の身体を動かしたく

なると言う人は多くいる。しかし、だからといって、無目的な活動を長時間行う人は少いだろう。運動の目的や意義を正しく理解させないで、ただやたらと「体育」は動きまわってエネルギーを消費させれば、学校体育の目的は果せると思っているエネルギー型の教師の影響や大なると思わざるを得ない。一時間中動きまわって、その結果、深い満足がその個人に生じるとでも思っているのかもしれない。「ただ身体を動かすのが好きだから」と多くの社会人が回答する責任は、どうやら学校体育に原因があるかもしれない。

人間の運動の意義は、エネルギー消費が目的ではなく、エネルギーを消費して、質的に高い運動情報を得ることに意味がある。具体的には、生れてから死ぬまでのその個人に必要な運動に関する情報を筋肉系で検証しながら自己と外部環境の正しい認識を得ることである。その検証ルートの体系化が人間の運動行動の最終目的である。社会人が、生理学的平衡のずれや、賦活機能 (arousing function) だけに基づいた無目的な一般活動性を好むとは思えない。「身体を動かすことにより生物学的生存欲求を満し、それにもとづいて自己的能力を直接知ることが好きだから」運動やスポーツをするのだと言わせるような社会体育を考えられてよからう。

(3)わが国の社会人の運動・スポーツ経験やそれに対する意見および態度は、その大部分を学校体育やクラブ活動に依存している。

これは、いいかえれば、運動・スポーツの方法や意義は常に教師やコーチから「必要なものとして」教授されてきたことを意味する。いろいろな運動・スポーツを教育されることは、大いに歓迎すべきであるが、一度、学校を卒業して、「この種の指導者にめぐまれない社会環境においては、いくつかの問題が生じる。

まず、学校体育の場合、一度に多くの人を集団的に活動させるため、教師は非常な心身の負荷を背負っている。いきおい、その指導形態は「必要なもの」だけを一方通行的に伝達し、その結果をまってつぎつぎと運動をやらせるということになる。(これらの授業形態は、何も「体育」だけに限ったことではないが)、このような学校体育にお

いては、学習者はまことに受動的で、教師や専門家の意見や判断を無批判に受け入れようとする傾向や与えられた規則や基準に従って行動することで安定感を保とうとする傾向を持ちやすく⁹⁾、「最少必要量しか動かない」態度を形成する。

つまり、学習者は、他の権威から外的動機づけ(たしかに、体育教師の大半は、何を教育するかよりも、如何に動かすかに、相当なエネルギーを使っている)で運動をやらされ、彼ら自身の自発的な決定にもとづいた創造的活動を見ることは、とくに学年が進むにつれて(受験体制)少なくなる。

学校体育における「必要」からの授業形式は、学習者自身の欲求から生じた運動を認めにくい機構を含んでいる。もし、このようなトレーニングを長年体験すると、一度自由にされると、その時間何をどのようにしたらよいかのプログラムが立てられず、本来の「遊び」とは、ほど遠い形式的な動きの散発が見られることが多い。

社会人のレクリエーションの最大公約数は「旅行」である。しかし、その旅行計画から実施、結果の意味づけが、いかに「受動的」かは、いつも問題にされる。社会人の社会体育活動の不活発さを学校教育にもとめるか、それとも、現在の管理社会の息苦しさにもとめるかはこれから問題である。

学校体育の「必要最小限」の運動量や「受動的」運動態度をいくらかでも克服できるのが、クラブ活動である。本来の運動クラブは運動やスポーツを愛好し、楽しむことを目的として同好の人々の自発性、自主性を尊重した運動集団である。現在の経済性を重んじた社会における「受験体制」が、いかにこの種の活動機会を減少させているかは、ここではとりあげないが、クラブ活動経験者が、社会体育の先導的モデルの一翼をになうこととは十分考えられる。そういう意味から、彼らの経験を社会体育のプログラムに反映すべく一般化が急がれねばならないだろう。

社会人の運動・スポーツに対するやる気のなさを、特に学校体育、受験体制下のクラブ活動、および高度管理社会の自己疎外にその原因を求めてはみたが、これら全体が正常化しないかぎり、社

会人の運動実施は不可能だとする考え方はとりたくない。

社会人にかぎらず、運動・スポーツをやることに少なからず抵抗を示す人の特徴として注意すべきものは、対象に与える意見とか価値観が、ややもすると「結果」から導びかれたものが多いということである。

常識的には、運動経験者の方が未経験者よりも、運動・スポーツに与える価値は積極的意味づけが多い。では、両者が運動・スポーツに対して、価値があるという同じ結果を示した場合を考えてみると、そこに明瞭な差が見出されることが多いある。

つまり、運動経験者は運動・スポーツに対して、「ひとつことを最後まで頑張り抜く能力がつく」「自己の技術の追求」「自己のベストを尽す」といった「過程」に価値をおく意見が聞かれるが、一方、運動未経験者においては「健康増進」「人格形成」「人間関係」「精神力」といった「結果」に重点をおいた価値附与を運動・スポーツに対して行なう傾向がある。これは、運動・スポーツにかぎらず、すべての領域で見られることがらだろう。

母親が自分の子どもに「大きくなったら何になりたいか」と質問をする。子どもは「医者」とか「プロ野球の選手」とか「芸術家」などと目を輝やかして答える。しかし、母親は、「それらは、すべて非常に困難である」と一応は笑って相手にしないことがしばしばである。これは、子どもが、「結果」の過大に意味づけられた情報だけに注意を向けているのに対して、母親は「結果」に至るまでの口ではない努力の「過程」を重視しているからである。両者の将来への人生展望が、その「過程」を重視するか、それとも「結果」を重視するかによって、そこに異なった価値づけが行なわれる例である。

人間がかかわりをもつ領域ならば、どの領域だろうと、未経験者は「結果」や「格言」を好み、経験者は、その「過程」自体に魅力を感じるのが常である。さらに、そのことは、未経験者が運動・スポーツをやり始める学習初期においては、「結果」のすばらしさに動機づけられて行動を開

始するが、しだいに経験を積むにしたがって、「結果」の見せかけから、「過程」の充実に気づき、最終的には、「過程」に動機づけられて運動・スポーツを行なうようになることが示唆されるだろう。

これまで、いかに多くの社会人が「結果」にひかれて、運動・スポーツを始め、そして、挫折し、それ以後、運動・スポーツを消極的にしか価値づけられない人間になっていったかを、この際明らかにする必要があろう。

運動経験に対する関心のうすさから、傍観者的知識を増大させ、運動・スポーツに対するアンケートには「明朗」「人間形成」「根性養成」などと安易な価値づけをし、形式的で画一的な運動観を観念的に操作して喜んでいる社会人は案外多いと思われる。

高度な人間的資質をめざして、運動・スポーツを始め、挫折するよりも、低次な運動不足解消を目的に「水泳」を始め、そこでのトレーニング過程で、新しい友人を得、自己の客観的能力を正しく認識し、自信をつける方が、何よりも必要なことである。観念的な目標や手段を欠いた思考は非生産的であり、行動への立ち上りを過大に抑制する。

社会体育における動機づけは、運動・スポーツにたいする価値論を抜きにしては考えられないが、「結果」→「過程」か「過程」→「結果」をもう一度よく考えてみる必要がある。なぜなら、過大な対象への価値づけが、それへの実践力を失なわせるからである。

(4) そうはいっても、最初からものごとの真髓を極めることは困難である。それだけに、社会体育を志向している多くの人々には、「必要感」だけでは心もとなく、「格言」解きによって抽出された高次欲求の提示が待たれているといってよからう。

実際に、質問紙の結果によると、一次と三次の運動欲求が多く回答されていた。もし、これらを額面どおりに受け取ると、学校体育における「必要」な単位や必要な最少運動量といった効用主義によって習得された運動欲を「運動不足やストレスの解消のため」「健康体力の保持・増進」「体を動かすことが好きだから」といった“理解され

ているだけの動機”として回答し，“実際に有効な動機”¹⁰⁾として、「明朗」「自主性の養成」「自信・決断力の養成」「余暇の善用」「自己の能力発揮」「根性の養成」「成就欲求の充足」といった自己内発的動機を主要な行動始発源として位置づけているのかもしれない。

このような社会人に、その上「必要感」からだけの運動処方を行なうことは、人生問題で苦悩している人にビタミンや抗生物質を与えていくことになるだろう。

われわれは、まったく人間の運動行為に「必要」次元の欲求が不必要だという極論をするつもりはない。ただ、「人間の行動は、生物的必要ばかりでなく、変化への熱意によって支配されている」ということも、社会体育を考えていく上で是非必要であると強調したいだけである。

人間の生命というか生存への継続は、これまでのことを考慮に入れて考えると、生理的平衡の維持とか回復が主要関心事ではなく、「生物開放システムの教義が明らかにしているように、それらの非平衡の維持が本質的なものである」¹¹⁾ということになろう。

このことは、人間が生きていくためには、複雑で変化に富んだ環境からの情報を適切に処理しながら、目標との関係から自己の行動を制御していく必要があることを要請されているといってよからう。このような人間の適応行動は、いいかえれば、目標値と実際反応値間の最大情報伝達のプロセスといってもよからう。そして、目標（運動欲求）と反応（運動行動）との間のギャップを間断なく最少にすることに動機づけられて動きが誘発されるが、それはあくまでも、静的な平衡への努力ではなく新しい目標（生理的欲求→社会・文化的欲求）をめざしての非平衡への努力である。

そういう意味からいえば、社会人の運動欲求は、いかに目標に到達すべきかではなくて、むしろ「到達するに値する目標（運動欲求）をいかに決定できるか」に神経を集中することになるといえよう。つまり、生物的欲求次元から社会的欲求次元、さらに文化的（非効用的）欲求次元への挑戦を覚悟しなければならないのである。社会体育がめざすものは、このような非効用的生存への挑

戦の過程内に含まれるが、その挑戦の過程でわれわれ、すべての人が気をつけなければいけないことは、メルヴィルの書いた「白鯨」の中のキャプテン・アーノルドの言葉「私の手技はみんな正しいのだが、動機と目標が狂っている」ということである。

(5)社会人のための社会体育にとどまらず、人間すべての社会体育を考えた時、おのずから、現在および将来にたいする人間像によって、その行動戦略を異にすると思われる。

病気にならないための運動、長寿のための運動、高血圧や肥満防止のための運動を強力にやらなければならない社会体育は、どちらかというと、効用的生存欲求を充足するためのものである。そこでは、人間をホメオスタシスや均衡、順応、自己保存、防衛、適応などの単純で消極的な概念でとらえる傾向が生じる。

また、わが国のような高度な経済成長を遂げた国においては、人間の行動は経済原理に支配されやすくなる。経済原理のもとでは、行動は効用主義的なものとなり、「もっとも経済的な仕方で、すなわち精神的・肉体的エネルギーの最小の犠牲において」行なわれる。つまり、実際面では、最小要求がまかり通るということである。できるだけ短時間で高収入、できるだけ無駄な教科をやめて、有名校へ、できるだけ人件費を少なくして生産を高める、できるだけ動かないで、長生きをすることが、経済原理の支配的な世の中を生きていく価値ある行為なのである。

しかし、これまでにも述べてきたとおり、人間を非平衡、不一致、創造、好奇心、個性といった複雑で積極的な概念でとらえることも必要である。つまり、効用主義的人間観を補う意味での非効用主義的人間観の確立がこれからの人間の質を決めるのではないかと思われる。生物学的価値を越えた能動的な人間像を社会体育の中で育てる必要があるのでなかろうか。

わが国の高度経済成長は、社会の進歩とともに、多くの弊害も生みだしたことは衆知の事実である。現在、この進歩の意味についていろいろな角度から提言がなされている。

ポールディング¹²⁾によると「G N P または国民

所得を経済的福祉の指標にすることには疑問を呈しながら……なによりも経済社会の進歩は、低い組織水準の経済から高い組織水準のそれへの推移で示される。そして、そのような進歩をあらわす組織化の増大は、生産や消費それ自体からというよりもむしろ、消費を超える生産の超過分、すなわち蓄積から導きだされる」と述べている。

大量生産・大量消費が社会の進歩とはいえず、それよりも「社会的富」（精神・身体的文化欲求が充足できる生活環境）を多く蓄積することが、わが国の現在および将来の課題である。社会人が、身体的文化欲求を享受するための社会的富の貧しさ故に、このような社会体育の研究をしなければならないことになるのである。人間の発展は、

「本質的には、生物的な欲求と機能を、本来の意味と目的を失った活動に置きかえる能力」によって示すことができる。受動性が社会および個人の進歩にはほとんど役立たないように、「必要感」からの行動は、自由度を小さくし、人間らしい喜びは少ないのである。それは、ウェーバーの言葉である「すべては生命を保持する傾向に向かっているように思えるが、その生活を価値あるものにしようとするものはほとんどない」¹³⁾に尽きていると思われる。非効用的生存への挑戦は、いま、社会体育がめざす重要課題といえよう。

以上のような理論的仮定から、社会人の運動・スポーツ欲求を明らかにし、それらの欲求充足を可能にする個人的条件、社会的条件を整備・拡充することが期待される。

そこで、まず、社会人が持っている運動欲求と実際の運動行動との間の一一致・不一致を図式化し、そこで見出される不一致（conflict）をいかに解決するかを問題にする。

ある理論的枠組を背景にもち、現実の問題解決に役立てることが、多次元・非線型の世界では必要である。社会体育の現実的な目標は、このような社会人一人ひとりがもつ、運動欲求のコンフリクトをいかに解決するかということであり、さらに進んで、新し欲求の設定で非平衡的発展をめざすことにある。このような流動平衡を実現化するためにも、まず、彼らが示す運動欲求と運動行動との間のコンフリクトの型を明らかにしなければ

ならない。そして、それぞれのコンフリクト事態を解決する手順というか規則が定式化できれば、そこに社会人にたいする運動・スポーツに関する動機づけおよび行動戦略の方法論が確立できるのではないかと考える。それには柔軟な態度で方法をとりあげる必要がある。

そこで、これまでの、文章の多義性、被調査者の拒否的・反発的態度が調整できない、応答の確実性の程度が確認できないなどの不利をもつ質問紙法に代えて、一対一で質疑応答しながら問い合わせ補足したり、計画的に相手の態度を調整して、対象者自身の主体的見解や自己の内面状況を力動的に、しかも具体的に知る面接調査法¹⁴⁾を使用することにした。

VI. 目的

社会人の運動・スポーツに関する動機は、いかなる生存欲求が支配的なものかを探るために、まず、社会人の運動欲求と運動行動のコンフリクトの型を質問紙法で明らかにする。

そして、その型を基礎にして、動機の階層性、動機の発現とその発達、動機づけ状態や欲求が運動行動にむすびつくメカニズム、運動欲求に影響を及ぼす社会的要因などについて面接調査を行なう。これら両者の資料からそれぞれの個人がもつ運動欲求のコンフリクトを解決する方法の手がかりを得たい。

VII. 方法

（1）運動欲求にたいする調査項目

運動欲求と実際の運動行動の間の一一致・不一致を検出するために、Worell & Worell の人格コンフリクト（personality conflict）の測定法を参考にした¹⁵⁾。

Worell らによると「ある個人が何かをしたいと望んでいる動機と、その個人が実際に行動している動機とが一致すれば、その個人はコンフリクトのない状態にあると考える」。

このような個体内で生じるコンフリクト状態を人格コンフリクトと呼んでいるが、この場合のコンフリクト変数¹⁶⁾は「行動選択の内的矛盾：選択の比較」であり、その仮説としては「態度の論理

的矛盾が人格コンフリクトの全体を示唆するのと同様に、特殊なコンフリクトは、そのコンフリクトに関する範囲内で目標の統合性を欠くような行動選択に見られる」というものである。さらに、

手続きとしては、「種々の程度の論理的、現実的矛盾を含む対になった項目の選択をさせる。そして、矛盾した項目の選択数を取り上げる」とある。

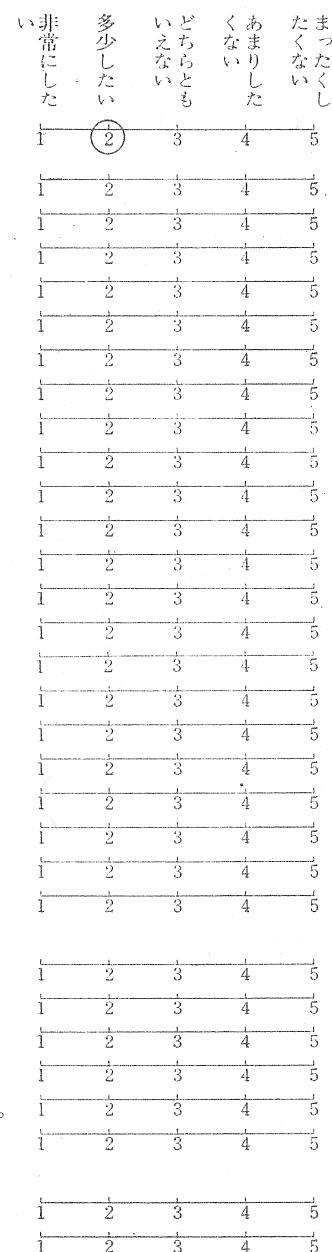
運動欲求にたいする調査 氏名

才男女

いろいろな運動やスポーツに関する欲求がかかけであります。それぞれについて、あなたが「したいと思う」程度を〔例〕にしたがって○を記入して下さい。

[例] 私は長生きするために運動やスポーツをしたい。

- 私は運動やスポーツにより、運動不足・ストレスを解消したい。
 - 私は運動やスポーツにより、健康・体力の保持・増進をはかりたい。
 - 私は毎日、あるいは週に何度かの一定時間の運動をしたい。
 - 私は食欲を増すために、運動やスポーツをしたい。
 - 私は運動やスポーツにより、よく眠りたい。
 - 私は運動やスポーツにより、気分転換をしたい。
 - 私は身体を動かすことが好きなので運動やスポーツをしたい。
 - 私は体力維持のために歩くことを心がけたい。
 - 私は異性といっしょに運動やスポーツをしたい。
 - 私は休日には運動やスポーツをしたい。
 - 私は家族全員で運動やスポーツを楽しみたい。
 - 私は運動やスポーツにより友人を得たい。
 - 私は良い施設や指導者にめぐまれて、運動やスポーツをしたい。
 - 私は美容のために運動やスポーツをしたい。
 - 私は運動やスポーツにより競争心を満足させたい。
 - 私は運動やスポーツをすることによって、他人から認めでもらいたい。
 - 私は運動やスポーツにより、人間関係や交際を円滑にしたい。
 - 私は運動やスポーツをするとき、リーダーになりたい。
 - 私は運動やスポーツと仕事(勉強)を両立させたい。
 - 私は何かの運動・スポーツクラブにはいりたい。
 - 私は運動やスポーツを余暇の善用に役立てたい
 - 私は運動やスポーツの技能を質的に高めたい。
 - 私は運動やスポーツにより、人格形成や精神力(忍耐力・根性)を養いたい。
 - 私は運動やスポーツにより、成しとげたあの満足感を味わいたい。
 - 私は運動やスポーツにより、計画性を身につけたい。
 - 私は運動やスポーツにより、自信や決断力を養いたい。
 - 私はひとつだけなく、いろいろな運動やスポーツを自発的にやりたい。
 - 私は運動やスポーツにより、自分というものを少しでも知るようにないたい。
 - 私は生きがいのある生活するために運動やスポーツを積極的に生活にとり入れたい。
 - 私は運動やスポーツで自己のベストを尽くしたい。



資料 1 A

運動欲求にたいする調査 氏名

才男女

いろいろな運動やスポーツにたいすることがらがかかげてあります。それについて、あなたが「実際にしている」程度を[例]にしたがって○を記入して下さい。

[例]私は長生きするために運動やスポーツをしている。

- 私は運動やスポーツにより、運動不足・ストレスを解消している。
 - 私は運動やスポーツにより、健康・体力の保持・増進をはかっている。
 - 私は毎日、あるいは週に何度かの一定時間の運動をしている。
 - 私は食欲を増すために、運動やスポーツをしている。
 - 私は運動やスポーツにより、よく眠れるようになっている。
 - 私は運動やスポーツにより、気分転換をしている。
 - 私は身体を動かすことが好きなので運動やスポーツをしている。
 - 私は体力維持のために歩くことを心がけている。
 - 私は異性といっしょに運動やスポーツをしている。
 - 私は休日には運動やスポーツをしている。
 - 私は家族全員で、運動やスポーツを楽しんでいる。
 - 私は運動やスポーツにより友人を得ている。
 - 私は良い施設や指導者にめぐまれて、運動やスポーツをしている。
 - 私は美容のために運動やスポーツをしている。
 - 私は運動やスポーツにより競争心を満足させている。
 - 私は運動やスポーツをすることによって、他人から認めもらっている。
 - 私は運動やスポーツにより、人間関係や交際を円滑にしている。
 - 私は運動やスポーツをするとき、リーダーになっている。
 - 私は運動やスポーツと仕事(勉強)を両立させている。
 - 私は何かの運動・スポーツクラブにはいっている。
 - 私は運動やスポーツを余暇の善用に役立てている。
 - 私は運動やスポーツの技能を質的に、より高めている。
 - 私は運動やスポーツにより、人格形成や精神力(忍耐力・根性)を養っている。
 - 私は運動やスポーツにより、成しとげたあとの満足感を味わっている。
 - 私は運動やスポーツにより、計画性を身につけている。
 - 私は運動やスポーツにより、自信や決断力を養っている。
 - 私はひとつだけでなく、いろいろな運動やスポーツを自発的にやっている。
 - 私は運動やスポーツにより、自分というものを少しでも知るようにしている。
 - 私は生きがいのある生活をするために、運動やスポーツを積極的に生活にとり入れている。
 - 私は運動やスポーツで自己のベストを尽くしている。

資料 1 B

そこで、調査は次のような「運動欲求にたいする調査」項目を作製した（資料1. 参照）

資料1を簡単に説明すると、Ⓐが願望尺度（～したい）で、Ⓑが行動尺度（実際にしている）である。この運動欲求項目は、報告書1の質問紙における項目と関連を持たせるために、運動欲求の階層性を基礎に作製されたものである。

たとえば、項目1～項目10までは生理的欲求で、項目11～項目20までが社会的欲求、項目21～項目30までが自己実現的欲求である。

実際の手続きでは、まず被面接者に願望尺度を回答してもらい、続いて面接を行ない、さらに面接終了後に行動尺度を実施した。

コンフリクトの強度は次式で算出した。

附) 日本体育協会—社会体育の動機に関する面接調査「チェックリスト」

面接年月日 昭和 年 月 日

面接場所 _____

インタービュアー 氏名 _____

資料2

質問	回			答
1. 性別 年令	1) 男	2) 女	満()才	
2. 結婚 子供	1) していない	2) している	→子供()人	
3. 職業	1) 農林・漁業	2) 労務	3) 販売・サービス	4) 事務・保安
	5) 専門・管理	6) 主婦	7) 無職(職主婦を除く)	
	8) その他()			
4. 学歴	1) 義務教育終了	2) 旧制中学、新制高校卒	3) 旧制高専、新旧大学卒	
5. 休日	1) 月2～3日	2) 週1日	3) 週2日	4) 1週おき週休2日
	5) その他			
6. ヒマの程度	1) 全くヒマがない	2) ヒマがない方	3) ヒマがある方	
	4) ヒマがありすぎる			
7. 健康状態	1) かなり丈夫	2) やや丈夫	3) ふつう	4) やや悪い 5) 悪い
8. 体力	1) かなりある	2) ややある	3) ふつう	4) ややない 5) かなりない
9. 運動不足感	1) いつも感じている	2) 時々感じることがある	3) 感じていない	
10. 学生時代運動のすき・きらい	1) すきなほう	2) ふつう	3) きらいなほう	
11. 学生時代運動の得意・不得意				
12. 学生時代のクラブ	時代→中学 種目→	() はいっていた いない	高校 () はいっていた いない	大学 () はいっていた いない
13. 現在の実施程度	1) 週3回以上	計()時間	→その種目()	
	2) 週1・2回	計()時間	→その種目()	
	3) 月1・2回	計()時間	→その種目()	
	4) それ以下			
14. 運動・スポーツの経験タイプ	学校を卒業してから現在に至るまでの実施状況を聞く			

$$\text{コンフリクト得点} = \frac{\text{行動尺度の変化数}}{\text{願望尺度得点}} \times 100$$

ここで、分子の行動尺度の変化数というのは、最初の願望尺度で②とし、次いで行動尺度で同じ項目に対して②以外の尺度に○印をつけた場合に変化数1とする。また、分母の願望尺度得点は、質問項目数に等しく、ここでは30である。そして、このコンフリクト得点が、(0~34%)を低コンフリクト、(35~67%)が中コンフリクト、(68~100%)が高コンフリクトとして処理をした。

(2) 面接法

一対一の面接は、できるだけ静かな場所（研究室、会議室、ホテルのロビーなど）で行なわれた。面接を進めるにあたって、あらかじめ用意された面接のためのチェックリストを手もとに置いて、内蔵されたマイクを含むテープレコーダーを用いて質疑応答の内容を録音した。

面接に使用したチェックリストは資料2の通り

である。この調査用紙への記入は、被面接者と話しながら記入するもので、記録の大部分はカセットテープに録音された。一人当たりの面接に用いた時間は平均して45分くらいであった。

(3) 被面接者と面接期日

男子と女子の被面接者の内訳は以下のとおりであるが、この内男子4名と女子5名はコンフリクト得点が算出できず、以下の考察から除外した。

男子 (21才~45才) 29名

女子 (22才~43才) 28名

昭和48年12月2日～昭和48年12月24日まで

(4) 面接者

この面接調査に協力した諸氏は、江川政成、落合 優、嘉戸 健、調枝孝治の4名である。

VII. 結果と考察

(1) 被面接者の特性

まず、被面接者の特性を、表1と表2からうか

資料2

項	目	チ エ ツ ク
1. 動機の種類		
一次的欲求（生理的欲求）	過去	
二次的欲求（社会的欲求）	現在	
三次的欲求（自我・自己実現）	将来	
2. 動機の機能		
運動不足感		
一般的運動不足感		
特殊的運動不足感		
◎不足感が必ずしも運動（Out Put）を生じない。だから、動機づけの状態や欲求が運動行動にむすびつくメカニズムを明らかにする		
◎やる気はどういう時に生ずるか		
◎やる気はどのようにしたら持続できるか		
◎くりかえし訓練の意味はどこにあるか		
◎運動した後、どのように感じるか		
◎目標は何か→何がしたいか		
◎何をしようとしているのか		
	↓	
	運動欲求を満たす方法	
◎運動やスポーツの価値観を聞く		

資料2

項目	チ エ ツ ク
<p>3. 動機の発達</p> <p>◎運動やスポーツをはじめた時期 ◎どのようなことが動機を生じさせたか ↓ それは成長するにつれて、どのような経験 (情報の提供、新しい経験など)によって変化したか</p> <p>4. 動機の相互連関性と個人内の Conflict</p> <p>◎述べられる動機間の関係をとらえる ◎タテマエとホンネとのギャップをさがす (実際にしていること) ◎$\frac{\text{実際にしていること}}{\text{したいこと}} \times 100 =$ ↑ Conflict 得点を出す</p> <p>◎上記の葛藤をどのように処理しているか ◎どのような条件が障害となっているか ◎社会的要因(学生時代と現在)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 家族の状況 2. 友人(仲間)の影響 3. 地域の運施設の状況 4. 学校時代の体育の影響(授業、先生など) 5. マス・コミ 	

がい知ることができよう。

表1の男子においては、年齢分布は20代=6名、30代=16名、40代=6名であり、30代が最も多い。わが国の社会人の30代と40代に属する者が最も運動経験が少いといわれているが、この表の被面接者でも「運動不足感」を相当感じていると回答している。しかし何をもって運動不足と決定しているかは、基準があいまいでこれ以上言及できない。

QとVとXがどちらかの運動・スポーツクラブに所属しているが、その中でQとVだけは運動不足感を覚えないということである。スポーツクラブでの運動欲求充足がある程度果されている結果である。

職業はほとんどが事務系と専門・管理に属し、Bだけが大学院の学生である。日常あまり身体活動をやらない職種である。休日は週1日が半分以上で、まずは平均的社会人である。

結婚と子どもの数は相関があるが、30代では、まだ両親と一緒に運動やスポーツを楽しむまでには成長していない。しかし、それが40代になると、

子どもとの交歓が実現化する機会が多くなる。さらに、この年代になるといわゆる子どもに手がからなくなるため、現在の運動実施程度はかなり良好である。

社会体育における、家族の参加形態は重要な要因であり、そこでは当然、バラエティーに富んだ運動プログラムを要求されると思う。

健康状態と体力は、JとCを除いては、丈夫かふつうであり、一次的欲求は大部分の人が処理しているのではないかと思われる。

つぎに学生時代の運動のすき・きらい、学生時代の運動の得意なもの、不得意なもの、学生時代のクラブ活動などの項目は、すべて現在の実施程度や学校を卒業してから現在までの運動・スポーツの経験タイプとその実施種目などの項目と関係づけて検討する必要がある。

それによると、学校を卒業して、社会人になってから、今までに運動やスポーツをどのくらい経験しているかの欄では、学生時代のクラブ活動の影響が大である。これらのこととは、報告書1²⁾

の結果と一致している。クラブ活動における、技術的能力もさることながら、運動のやり方に対する知識があるため、社会でても活動様式が転移していると考えられる。運動はほとんどがスポーツ種目であり、ある程度ブームといった要素に影響を受けていると思われるふしが見受けられる。それは、クラブ活動で実施した運動・スポーツ種目と、社会人になってから行なう運動・スポーツ種目において、いくぶん異なった様相を呈しているのをみてもわかると思う。

これらは、施設や仲間などの影響で、学生時代の種目が継続できないという理解も成立するが、見方をかえれば、スポーツブーム（ゴルフ、ボーリング、テニス、水泳など）の中で、自由にいろいろな運動種目を自発的に経験してみたいという三次的欲求の現われともとれる。

それにしても、これらの被面接者は、大部分が運動環境（大学施設・スイミングセンター、職場施設）が比較的手近にあるせいか、これまでの社会人を対象にした被験者よりも、かなりの運動経験をしている人たちであるといえる。

なお、男子の α 、 β 、 γ 、 δ の4名と女子のネ、ノ、ハ、ヒ、フの5名は、「運動欲求にたいする調査」を実施したが、運動欲求のコンフリクト得点が出ず、分析から除外した。

表2の女子においては、20代=8名、30代=14名、40代=5名という年齢分布であった。女子も男子と同様に30代が圧倒的に多い。女子は、実に14名の者が、何らかのスポーツ・クラブに所属しトレーニングを積んでいる社会体育実践派である。そのため、彼女たちから得る情報は有効な面もあるが、どちらかというと、一般の「やりたくて、やっていない人たち」や「やりたくない、やっていない人たち」への「やる気」を起させるための情報としては、少し情報が高度すぎるし、整理されたものが手に入りやすい。その結果、これらの人たち（クラブ所属者）の情報をうまくとりあげる必要がある。

女子の場合、特徴的でしかも社会体育にネガティブな要因として問題になるのは、出産と育児である。これらの被面接者においても、30代と40代で子どもが平均2人はおり、大部分の人が、この

ため運動をしたくてもできない期間を体験している。

運動欲求の阻害は、常識的には内的葛藤を生みだすと考えられる。しかし、この欲求阻止が、次の行動の活動水準を以前のレベルより著しく向上させることもある。この点から考えれば、子どもに手がかからなくなつてからの彼女らの活動ぶりが理解される。つまり現在の健康状態・体力の項目で「かなり丈夫」という回答をし、運動不足感では「感じていない」という人が多いことからもうなづける。

学校を卒業してから現在までの運動・スポーツ経験のタイプの項目で、「時々実施」とあるのは、大部分、先ほど述べた出産・育児のための一時休止期があるためである。

女子の学生時代のクラブ活動の影響が、現在の実施程度に与えている効果は特徴的である。それにひきかえ、学生時代のクラブ経験のない者は現在ほとんど運動と名のつくものは実施していないことがわかる。

男子と同様に、このクラブ活動経験は、学校体育の影響よりも大きく、いかに“自発性”が重要かわかるというものである。とくに女子は、その経験が高校時代のものが多く、多感な時期の苦しみ・楽しみの経験は、忘却率が小さく、社会生活において充分生かされていることは賞賛されてよいと思う。

社会体育を充実するには、年少時からの自由なそれでいて目的的な活動が望まれる。運動は、数学や物理や外国語とちがって、日常的・常識的レベルの行動である。母国語と同じように習慣化する方が成人してからの意識的・反省的努力の負担を軽減するのに役立つと思う。

一方、他の「運動実施せず」に属する人たちも、学生時代は運動クラブではなく、文化クラブ的な欲求や勉学欲求に運動クラブ所属者と同じくらいの時間を尽いやして活動をしてきているという。考えてみれば当然で、人間の基本的欲求には、運動・スポーツ以外にも多くの欲求がある。この報告書は、その中の身体運動欲求の側面に焦点をあてているので、ややもすると他の人間欲求を無視しがちであるが、その点は充分考慮して述べるつ

表1 各質問項目にたいする被面接者の特性(男子)

表2 各質問項目にたいする被面接者の特性(女子)

表3 運動欲求の階層性にたいするコンフリクト得点とコンフリクトの型(男子)

	欲求 次元	被験者名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
1	運動不足・ストレス解消	1→2 I	2→1 II	2→4 III	1→4 IV	2→5 V	2→6 VI	2→7 VII	2→8 VIII	2→9 IX	2→10 X	2→11 XI	1→8 XII	3→4 XIII	2→2 XIV	2→5 XV	2→2 XVI	2→2 VII	2→2 VIII	2→2 IX	1→3 XI	1→4 XII	1→1 III	2→2 IV	1→1 II	1→1 I	1→2 II	
2	健康・体力の保持・増進	1→2 I	1→1 II	4→4 III	1→4 IV	2→4 V	1→2 VI	3→3 VII	2→3 VIII	1→5 IX	1→5 X	1→5 XI	1→5 XII	1→5 XIII	1→4 XIV	1→4 XV	1→2 XVI	1→2 VII	1→2 VIII	1→2 IX	1→2 XI	1→2 XII	1→2 III	1→2 IV	1→2 V	1→2 VI	1→2 VII	
3	一定時間の運動	1→2 I	1→1 II	5→2 III	1→9 IV	2→4 V	1→5 VI	2→2 VII	2→2 VIII	1→5 IX	1→5 X	1→5 XI	1→5 XII	1→5 XIII	1→4 XIV	1→4 XV	1→2 XVI	1→2 VII	1→2 VIII	1→2 IX	1→2 XI	1→2 XII	1→2 III	1→2 IV	1→2 V	1→2 VI	1→2 VII	
4	食欲増進	1→2 I	3→4 II	1→5 III	1→5 IV	2→4 V	3→4 VI	2→4 VII	2→4 VIII	2→4 IX	3→3 X	4→4 XI	3→3 XII	3→3 XIII	2→3 XIV	2→3 XV	3→3 XVI	3→3 VII	4→5 VIII	3→3 IX	3→3 XI	3→3 XII	4→5 III	5→5 IV	3→3 V	5→5 VI	3→3 VII	
5	よく眠りたい	1→2 I	3→3 II	2→11 III	2→3 IV	1→8 V	1→9 VI	2→4 VII	2→5 VIII	2→3 IX	2→4 X	2→4 XI	2→4 XII	2→4 XIII	2→4 XIV	2→4 XV	2→4 XVI	2→4 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	4→4 III	5→5 IV	2→3 V	4→4 VI	5→5 VII	
6	気分転換	1→2 I	2→2 II	2→2 III	3→3 IV	2→4 V	2→4 VI	1→1 VII	1→5 VIII	1→5 IX	1→5 X	1→5 XI	1→5 XII	1→5 XIII	1→4 XIV	1→4 XV	2→2 XVI	2→2 VII	2→2 VIII	2→2 IX	1→1 XI	1→1 XII	1→3 III	2→2 IV	2→2 V	2→2 VI	2→2 VII	
7	身体を動かすのが好き	1→2 I	1→1 II	4→4 III	1→4 IV	1→4 V	1→4 VI	2→2 VII	2→3 VIII	1→5 IX	1→5 X	1→5 XI	1→5 XII	1→5 XIII	1→4 XIV	1→4 XV	2→2 XVI	2→2 VII	3→3 VIII	1→1 XI	1→1 XII	1→3 III	2→2 IV	2→2 V	2→2 VI	2→2 VII		
8	体力維持の歩行	1→1 II	2→2 I	2→2 II	1→11 III	2→3 IV	2→3 V	2→2 VI	1→2 VII	1→2 VIII	5→6 IX	1→2 XI	1→2 XII	1→2 XIII	1→4 XIV	1→4 XV	3→3 XVI	3→3 VII	4→5 VIII	1→2 XI	1→2 XII	1→1 III	1→1 II	1→1 IV	1→1 V	1→1 VI	1→1 VII	
9	異性とのスポーツ	1→2 I	2→1 II	4→4 III	2→5 IV	2→4 V	2→4 VI	3→3 VII	3→3 VIII	2→4 IX	2→5 X	2→5 XI	2→5 XII	2→5 XIII	2→5 XIV	2→5 XV	2→5 XVI	2→5 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	3→3 III	3→3 IV	2→2 V	2→2 VI	3→5 VII	
10	休日の運動・スポーツ	1→4 IV	1→2 II	2→5 III	2→3 IV	1→4 V	2→3 VI	1→2 VII	2→3 VIII	1→2 IX	2→3 X	2→3 XI	2→3 XII	2→3 XIII	2→3 XIV	2→3 XV	2→3 XVI	2→3 VII	1→4 VIII	1→4 IX	1→4 XI	1→4 XII	1→2 III	2→2 IV	2→2 V	2→2 VI	2→2 VII	
…次の欲求のコンフリクト得点	20%	10%	40%	50%	50%	40%	60%	40%	70%	80%	30%	50%	20%	10%	30%	10%	30%	10%	30%	10%	30%	10%	30%	10%	30%	10%	30%	
11	家族全員で楽しく	1→4 VII	2→2 II	2→5 III	4→4 IV	1→7 V	2→1 VI	2→1 VII	3→3 VIII	2→4 IX	3→3 X	2→4 XI	3→3 XII	2→4 XIII	2→4 XIV	2→4 XV	2→4 XVI	2→4 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	1→4 III	2→4 IV	1→4 V	1→4 VI	1→4 VII	
12	友人を得たい	3→5 IV	2→2 II	2→3 III	3→4 IV	2→5 V	3→4 VI	3→3 VII	3→3 VIII	2→4 IX	2→5 X	2→5 XI	2→5 XII	2→5 XIII	2→5 XIV	2→5 XV	2→5 XVI	2→5 VII	3→4 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	1→2 III	1→2 IV	1→2 V	1→2 VI	1→2 VII	
13	良い施設や指導者	3→5 V	3→2 II	1→1 III	3→3 IV	2→5 V	1→7 VI	2→5 VII	4→4 VIII	1→4 IX	2→3 X	1→1 XI	3→3 XII	1→3 XIII	1→3 XIV	1→3 XV	1→3 XVI	1→3 VII	2→3 VIII	1→2 IX	2→2 XI	2→2 XII	1→2 III	1→2 IV	1→2 V	1→2 VI	1→2 VII	
14	美学的な美	5→5 V	2→3 III	4→4 IV	2→5 V	3→5 VI	3→3 VII	3→3 VIII	3→3 IX	3→3 X	3→3 XI	4→4 XII	3→3 XIII	4→4 XIV	3→3 XV	5→6 XVI	3→3 VII	1→5 VIII	2→4 IX	1→5 XI	2→4 XII	3→4 III	5→5 IV	3→5 V	5→5 VI	3→5 VII		
15	競争心の満足感	5→2 III	3→2 II	5→7 IV	2→4 V	3→4 VI	3→3 VII	3→3 VIII	3→3 IX	3→3 X	2→2 XI	4→7 XII	5→5 XIII	4→4 XIV	5→5 XV	4→4 XVI	5→5 VII	3→3 VIII	4→2 IX	5→5 XI	4→4 XII	5→5 III	5→5 IV	5→5 V	5→5 VI	5→5 VII		
16	他人からのお褒め	5→2 III	3→2 II	3→2 III	4→4 IV	2→5 V	4→4 VI	4→4 VII	2→4 VIII	2→4 IX	2→4 X	2→4 XI	2→4 XII	2→4 XIII	2→4 XIV	2→4 XV	2→4 XVI	2→4 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	1→4 III	2→4 IV	1→4 V	1→4 VI	1→4 VII	
17	人間関係や愛情	5→2 III	3→2 II	1→2 I	3→3 III	1→4 IV	3→3 V	3→3 VI	3→3 VII	1→4 VIII	1→4 IX	1→4 X	1→4 XI	4→4 XII	3→3 XIII	4→4 XIV	3→3 XV	2→2 XVI	1→2 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	1→2 III	1→2 IV	1→2 V	1→2 VI	1→2 VII
18	リーダーになりたい	5→2 III	2→2 II	3→3 III	4→4 IV	3→5 V	3→3 VI	3→3 VII	2→2 VIII	2→2 IX	4→5 X	3→3 XI	4→5 XII	3→3 XIII	4→5 XIV	3→3 XV	2→3 XVI	2→3 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	4→4 III	5→5 IV	3→5 V	5→5 VI	5→5 VII	
19	運動・スポーツ・仕事を両立	1→2 I	1→2 II	1→2 III	2→3 IV	3→4 V	3→4 VI	4→4 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 X	1→1 XI	2→3 XII	1→1 XIII	2→3 XIV	1→1 XV	3→3 XVI	1→1 VII	2→3 VIII	1→1 IX	2→3 XI	1→1 XII	4→4 III	5→5 IV	3→5 V	5→5 VI	3→5 VII	
20	スポーツクラブに入りたい	1→2 I	2→2 II	2→2 III	4→4 IV	2→5 V	2→5 VI	2→5 VII	2→5 VIII	2→5 IX	2→5 X	1→1 XI	2→5 XII	2→5 XIII	2→5 XIV	2→5 XV	2→5 XVI	2→5 VII	1→2 VIII	2→2 IX	2→2 XI	2→2 XII	4→5 III	5→5 IV	3→5 V	5→5 VI	3→5 VII	
…次の欲求のコンフリクト得点	70%	60%	40%	20%	100%	80%	0%	60%	20%	60%	70%	60%	60%	20%	100%	40%	50%	70%	40%	40%	60%	20%	0%	50%	10%	30%		
21	余暇の喜び	1→4 VII	1→2 I	1→4 II	1→4 III	2→4 IV	2→4 V	2→4 VI	2→4 VII	2→4 VIII	2→4 IX	1→1 XI	2→4 XII	2→4 XIII	2→4 XIV	2→4 XV	2→4 XVI	2→4 VII	2→2 VIII	2→2 IX	2→2 XI	2→2 XII	1→1 III	1→1 IV	1→1 V	1→1 VI	1→1 VII	
22	スポーツ技術の向上	1→4 VII	1→2 I	1→4 II	4→4 III	2→5 IV	3→5 V	2→2 VI	3→3 VII	2→3 VIII	2→3 IX	1→1 XI	2→3 XII	2→3 XIII	2→3 XIV	2→3 XV	2→3 XVI	2→3 VII	2→2 VIII	2→2 IX	2→2 XI	2→2 XII	4→4 III	5→5 IV	3→5 V	5→5 VI	3→5 VII	
23	人格形成や情操力	1→3 V	2→3 III	5→4 IV	3→4 V	1→5 VI	3→5 VII	4→4 VIII	2→4 IX	2→4 X	2→4 XI	1→1 XII	2→4 XIII	2→4 XIV	2→4 XV	2→4 XVI	2→4 VII	3→3 VIII	4→4 IX	3→3 XI	4→4 XII	1→1 III	3→4 IV	1→1 V	3→4 VI	1→1 VII		
24	成し遂げたあとの満足感	1→3 V	3→3 III	2→2 V	3→5 IV	3→3 V	1→4 VI	3→5 VII	3→4 VIII	4→4 IX	4→4 X	1→1 XI	4→5 XII	5→5 XIII	4→4 XIV	2→4 XV	3→3 XVI	2→2 VII	3→2 VIII	2→2 IX	3→2 XI	2→2 XII	4→4 III	5→5 IV	3→5 V	5→5 VI	3→5 VII	
25	計画性・身につける	3→3 V	2→3 III	3→4 IV	5→8 V	3→4 VI	1→4 VII	3→5 VIII	2→5 IX	2→5 X	3→5 XI	4→4 XII	2→5 XIII	2→5 XIV	3→5 XV	2→5 XVI	3→5 VII	5→6 VIII	3→5 IX	3→5 XI	3→5 XII	3→4 III	4→5 IV	3→5 V	4→5 VI	3→4 VII		
26	自信や決断力の養成	3→3 V	1→3 IV	4→4 V	3→4 VI	1→4 VII	2→5 VIII	1→4 IX	2→5 X	2→5 XI	1→1 XII	2→5 XIII	2→5 XIV	2→5 XV	2→5 XVI	2→5 VII	3→4 VIII	4→4 IX	3→4 XI	4→4 XII	5→5 III	4→5 IV	4→5 V	4→5 VI	4→5 VII			
27	いろいろな運動を自発的に	1→2 I	1→1 II	2→1 III	1→3 IV	3→4 V	1→3 VI	2→2 VII	2→2 VIII	1→1 IX	2→2 X	2→2 XI	2→2 XII	2→2 XIII	2→2 XIV	2→2 XV	2→2 XVI	2→2 VII	1→2 VIII	2→2 IX	2→2 XI	2→2 XII	2→2 III	2→2 IV	1→4 V	1→4 VI	1→4 VII	
28	自己を知るため	3→3 V	3→3 III	1→2 I	3→2 II	3→2 III	4→4 IV	3→4 V	3→4 VI	3→4 VII	3→4 VIII	3→4 IX	3→4 X	3→4 XI	3→4 XII	3→4 XIII	3→4 XIV	3→4 XV	3→4 XVI	3→4 VII	3→4 VIII	3→4 IX	3→4 XI	3→4 XII	1→1 III	3→3 V	1→1 VII	
29	生きがいのため	1→4 VII	1→1 I	2→1 II	1→1 III	2→1 IV	3→4 V	1→4 VI	2→5 VII	3→5 VIII	3→3 IX	1→1 XI	2→5 XII	2→5 XIII	2→5 XIV	2→5 XV	2→5 XVI	2→5 VII	3→3 VIII	2→3 IX	2→3 XI	2→3 XII	1→1 III	3→4 IV	1→1 V	3→4 VI	1→1 VII	
30	自己のベストを尽す	1→2 I	1→1 II	1→1 III	2→1 IV	2→3 V	4→4 VI	1→3 VII	2→3 VIII	1→3 IX	2→3 X	1→1 XI	2→3 XII	2→3 XIII	2→3 XIV	2→3 XV	2→3 XVI	2→3 VII	3→2 VIII	2→2 IX	2→2 XI	2→2 XII	4→4 III	3→4 IV	2→2 V	2→2 VI	1→1 VII	
…次の欲求のコンフリクト得点	50%	50%	40%	70%	100%	100%	0%	50%	20%	80%	80%	70%	70%	60%	100%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	30%	
三次の欲求のコンフリクト得点	46.7%	40.0%	40.0%	46.7%	56.7%	90.0%	0%	70.0%	26.7%	70.0%	76.7%	30.0%	100.0%	33.3%	100.0%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	33.3%	
全欲求のコンフリクト得点	50%	50%	40%	70%	100%	100%	0%	50%	20%	80%	80%	70%	70%	60%	100%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	60%	30%	

表4 運動欲求の階層性にたいするコンフリクト得点とコソフリクトの型(女子)

表5 全運動欲求次元のコンフリクト得点とコンフリクトの型のまとめ(%)

(男)	被面接者 年齢	低コントラクト群(N=10)										中コントラクト群(N=9)										高コントラクト群(N=6)									
		G	I	L	N	O	Q	T	W	X	Y	A	B	C	D	M	R	S	U	V	E	F	H	J	K	P					
欲求次元	30	30	32	34	33	38	40	42	44	45	25	26	28	30	33	38	41	41	30	30	31	32	31	32	37						
(コンフリクトの型) 一次の生理的欲求 (V・I)	40	30	10	20	30	10	40	0	20	20	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)		
(コンフリクトの型) 社会的欲求 (V)	20	50	20	40	20	50	20	0	50	70	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)		
(コンフリクトの型) 次第的自負的欲求 (K・I)	20	10	(1)	(1)	20	10	30	50	40	20	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)		
(全コンフリクトの型) 金欲求の次元 (V・K)	0.0	26.7	30.0	30.0	23.3	33.3	33.3	33.3	33.3	33.3	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*	30.0*				
(女)	(女)	低コントラクト群(N=13)										中コントラクト群(N=6)										高コントラクト群(N=4)									
被面接者 年齢	欲求次元	ウ	エ	ク	ケ	コ	サ	セ	タ	チ	ト	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	ヌ	
		(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	(K)	
(コンフリクトの型) 一次の生理的欲求 (V・I)	20	0	10	30	20	30	20	30	20	30	0	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20		
(コンフリクトの型) 社会的欲求 (V)	10	20	10	20	30	40	30	20	10	0	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)		
(コンフリクトの型) 次第的自負的欲求 (K・I)	20	10	0	20	10	0	10	0	10	0	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)		
(全コンフリクトの型) 金欲求の次元 (V・K)	16.7	10.0	6.7*	23.3*	16.7*	26.7*	20.0*	23.3*	20.0*	16.7*	26.7*	20.0*	23.3*	20.0*	16.7*	26.7*	20.0*	23.3*	20.0*	16.7*	26.7*	20.0*	23.3*	20.0*	16.7*	26.7*	20.0*	16.7*			

※何らかの運動スケーリングに所属している者 (注)低コントラクト得点(0-34%) 中コントラクト得点(35-67%) 高コントラクト得点(68-100%)

もりである。

(2) 運動欲求とコンフリクトの型

社会人の運動欲求と実際の運動行動との間にある内的不一致を明らかにするために、運動欲求の階層性に対応させて、各個人のコンフリクト得点が表示された。それが表3と表4である。

ここで、コンフリクト得点を算出する場合図1のようなコンフリクト・マトリックスを作り、願望型と行動型の一致・不一致の型を分類しやすくした。そして、図1の各マス内にIからIXまでの記号で、それぞれの一一致・不一致の尺度関係を表わすように努めた。

(※この図で3→1とは願望尺度3から行動尺度の1への変化を示す)

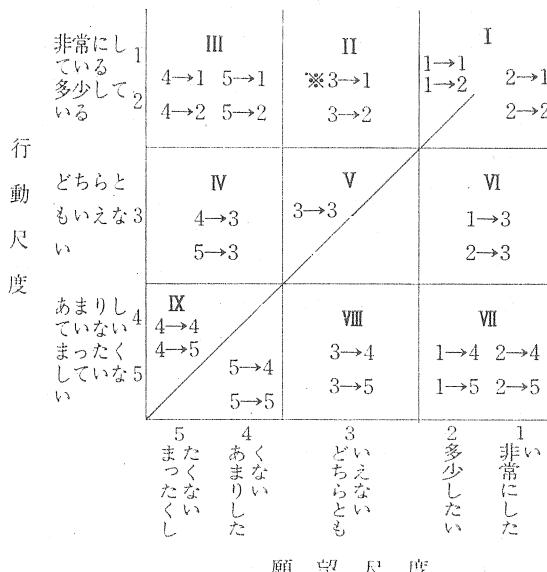


図1 コンフリクトの型のモデル

それによると、I型、V型、IX型は願望尺度と行動尺度で相互に変化が認められない一致した型でありコンフリクトはないものである。これ以外のII型、III型、IV型、VI型、VII型、VIII型は、何らかの願望尺度と行動尺度の不一致を示し、コンフリクト型である。また、表3と表4のコンフリクトの型の表示は、すべて図1のコンフリクトの型のモデルを基礎にして行なわれた。

これらの結果をもとにして、各人のコンフリクトの型を決定する作業を行い、その結果表5のよ

うになった。

表3と表4は、社会人の運動欲求と実際の運動行動の一致・不一致が詳細にわかるものである。これらの資料から、いろいろな角度の考察が可能であり、被面接者と一緒にながら相談することもできる。

たとえば、この表から、誰が、どの欲求とどの欲求でコンフリクトを生じ、どの欲求が充足されているかがわかる。また、コンフリクトのない満足型といっても、消極的満足型(IX)と積極的満足型(I)があり、その人たちが充足している運動欲求はどのようなものか無視している運動欲求はどのようなものが判明し、運動欲求のためのカウンセリングが可能である。この表をもとに、各人のバランスのとれた運動欲求充足のパターンができると考えられる。

しかし、コンフリクトの型の決定には、多様な傾向が存在するため、その決定のための基準作りには困難を感じることも事実である。

そこで、無理は承知で単純化を行なった。つまり、各人の各欲求次元で、最も頻数の多い型を各欲求次元の代表的な型として定め、さらに、一次欲求、二次欲求、三次欲求のそれぞれの型を検討して、全体で最も多い型をその人の全欲求次元のコンフリクト型とした。それが、表5の最下段の全コンフリクトの型という欄に記入してある。

たとえば、男子のNの場合は、一次欲求はI・IX・V型という混合型で、二次はIX・V型のこれも混合型、さらに三次もV・IV型である。全コンフリクトの型は、V型とIX型が比較的他の型よりも出現回数が多いため、最終的にV・IX型と決定している。

それから、コンフリクト得点を3区分して低コンフリクト(0~34%)、中コンフリクト(35~67%)、高コンフリクト(68~100%)とし、各人の相対的特徴を明確にするように試みた。

この表5を検討する場合、図1との類似モデルをわかりやすく表現した方がいいという考え方で表わしたもののが図2である。

図2の各マス内に表示してある(++)、(△+)は、最初が願望を表わし、後のものが行動を表わしている。

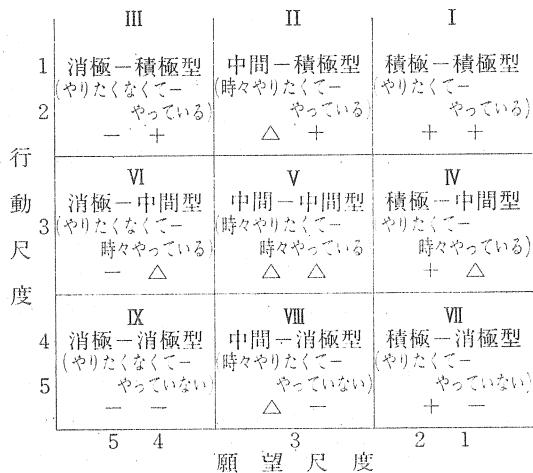


図2 コンフリクトの型のモデル

表5と図2を関連づけながらみると、男子の低コンフリクト群は、すべての欲求次元で満足な状態を示しているが、この中で、Lの二次と三次、Nの一次と二次、Gの三次、Oの二次と三次、Tの二次、Wの一次と二次と三次、Yの二次というように、大部分、二次と三次で消極消極型（やりたくないでーやっていない）の満足である。これらのIX型を生じた運動欲求を表3で調べると、二次欲求では「美容のため」（これはうなずけるが）「競争心の満足」「他人からの承認」などであり、三次欲求では「計画性を身につける」「自信や決断力の養成」「人格形成や精神力」などで、非常に多義的でしかも高度な内容をもつ運動欲求であることで、敬遠されたのかもわからない。

社会的欲求の中での「競争心の満足」と「他人からの承認」は、仕事の面でいやというほど経験させられているもので、何も楽しみのひとつである運動・スポーツの場合にまでこのような欲求を充足させることは避けたいという配慮からかもしれない。しかし、実際に運動・スポーツを始めると、この二要因は非常に大きなウエイトを持つことは認められている。

女子の低コンフリクト群は、ウとエの兩人を除いて、すべての人が、すべての運動欲求に文句なく積極一積極型を回答している。

最近の社会体育の中心をなしていると考えられ

るママサン・バレー・ボーラーやスイミングセンターに所属する人たちが多く含まれているので、このような結果になったと思われる。

果して、学校体育やクラブ活動で、このような結果が生じるかどうか興味あるところであるが、両者の機能的差異を分析してみると学校体育関係者も参考になることが多いと思われる。この人たちの運動欲求は、いわば生活の中のひとまとめて位置づけられている点が特徴的で、男子がその点まだ観念的にも実際行動の面でも分離しているといえよう。

また、積極一消極型（やりたくないでーやっていない）と中間一消極型（時々やりたくないでーやっていない）は男女とも同じ傾向で、施設・指導者・金・ひまなどの外的客体条件の不満足を表明している人たちである。その点で積極一消極型のやりたくないでーやっていないという表現はやりたくないでーできぬという表現のほうが妥当しているかもしれない。

わが国の社会体育の場合、一番問題になる型はIX型、VII型、VIII型である。さらに、この面接調査では、幸か不幸か結果に姿を現わさなかったIII型（消極一積極型）とVI型（消極一中間型）の人は、案外社会人には多く存在しているのではないかと疑われるタイプである。なぜなら、これら両型に属すると思われる人は、上役や同僚などの“つき合い”ゴルフやボーリングに見られる人たちであるからその可能性は十分考えられよう。

やりたくないのに、しかたなくやっているのは、受験競争下での学校体育や人づき合いの良すぎる性格づくりに間接的原因があるかもわからないが、社会の利害関係の中では、そうそう気の毒がっていてもはじまらない。

男子のAの二次欲求でIII型が特徴的に見られるが、若い人の場合、人づき合いの良さを消極的意味でとらえなくてもよい場合がある。それは、やりたくないても、一度は経験してみるという自己の経験というか認識の幅を広げるという意味があるからである。しかし、これが、若くない人の場合は、相当な葛藤を生じ、運動・スポーツの本来の意義までも消え失せることにもなりかねない。このIII型とVI型は質問紙では、直接とりだせない

と思うが、継続的行動観察や深層面接では明らかになるものと思われる。Ⅲ型とⅦ型でユニークな人は、運動やスポーツを職業にしている人びとである。能力が平均より優れているために、彼らは運動やスポーツを手段化しているのである。やりたくてやっている職人気質の人は、数が少なく、これは運動・スポーツに特有なことがらではない。

普通の社会人におけるこのⅢ型とⅦ型は、子どもに誘われしかたなくやっている父親から、地域の運動活動の役員、会社のつき合い野球、いろいろな型とコンフリクトの強度の関係で比較的多いと思われる。

(3) 生物的生存欲求と非効用的生存欲求の関係

ここで、この報告の最初に述べた、社会人の生物的生存欲求と非効用的生存欲求の関係について、それらの相対的重要度について検討してみよう。

表5をみると、男子よりも女子の方において、非効用的生存欲求（ここでは三次欲求）の充足が著しいことがわかる。これは、スポーツ・クラブでの活動が、「必要」レベルの欲求を直接の目的にしていなくて、それは当然充足されたものとして、非効用的生存欲求が追求されていることを示している。しかし、表5だけでは、詳細に述べられないで、より分析の目的にかなった資料を作らねばならない。

そこで、社会人が運動・スポーツを始めたり、現在やったり、将来やりたい理由としてどのような欲求を抱いているかを調べることにより、社会人の生物的生存欲求と非効用的生存欲求の相対的優先性をある程度把握できるのではないかと思い、面接のチェックリストの中の運動・スポーツの欲求に関する階層性と変動性についての報告を検討した。

その結果を整理したのが表6である。

この表6には、各コンフリクトの型に属する者が、過去・現在・将来という変動性にそって、それぞれの欲求次元に相当する自己の運動欲求を報告した頻度の合計値が示してある。

これは、1人が一次と三次の運動欲求を同時に過去にもっていて、現在は三次欲求だけになり、

将来は一次と三次の運動欲求をもってみたいという具合になった場合の頻度である。

まず、表6の右端に設けられている合計値欄をみると、男子では、過去に一次欲求を14人がもっていて、二次欲求は13人、三次欲求は6人と主として、過去（運動・スポーツをやり始めの時）では、生物的生存欲求と社会的生存欲求が同じくらい望まれ、非効用的生存欲求である文化的生存欲求は半分であった。

しかし、それが、現在から将来への欲求の変化を追ってみると、現在では一次=11、二次=7、三次=14で、二次欲求が減少し、三次欲求が増大している。そして、将来では、一次=7、二次=7、三次=16となり、圧倒的に非効用的生存への欲求が増加しているのがわかる。この傾向は、すべてのコンフリクトとの型についていえる。

これらのことから、最初の運動・スポーツに対する欲求は、生物学的生存欲求から発するが、だんだんと、その生存欲求から離脱し作業の過程での楽しさや、きびしさを経験することにより、自己に関係した非効用的生存欲求が希求されることを示している。この男子の結果からいえば、まず、常識的な結果であり、初心者や病的疾患者には、非効用的生存欲求で動機づけることは困難かもしれない。

しかし、それにしても、現在と将来で非効用的生存欲求が運動・スポーツをやる際の動因的性格を強く持っていることは、社会体育がめざすものの部分で述べた仮説的意見を検討してみなくてはならないだろう。

また、何らかの運動を現在やっている型（I・V・II・III・IV・VI）と運動を実施していない型（IX・VII・VIII）とを比較すると相対的に、運動実施型の方が一次よりも三次の欲求を充足することに特徴が出ている。

さて、女子における合計値にふれてみると、さらに非効用的生存欲求の充足を望む者が多いことがわかる。

過去では、一次=4、二次=18、三次=8と、男子よりも社会的欲求で動機づけられやすいことを示している。現在では、一次=8、二次=15、三次=17で、スポーツ・クラブの特徴がよく表わ

表6 運動・スポーツの欲求に関する階層性と変動性

		低コントリクト			中・コントリクト			高コントリクト			
コントリクトの型		(I・V)	(I・V)・(IX)	(XI)	(I・V)・ (II・III・V・VI)	(I・V)・ (II・III・V・VI)・ (VII・VIII)	(VII・VIII)・ (IX)	(II・III・V・VI)	(II・III・V・VI)・ (VII・VIII)	(VII・VIII)	
欲求の階層性		N=5	N=4	N=1	N=2	N=4	N=3	N=1	N=1	N=5	合計
男	[過去]	3	2	1	1	2	2	1	1	2	14
	一次的欲求	2	3	0	1	2	1	1	1	3	13
	二次的欲求	2	1	1	0	1	0	0	0	1	6
	[現在]	0	3	0	0	2	2	0	0	4	11
	一次的欲求	2	0	0	2	1	1	1	0	0	7
	二次的欲求	3	2	3	1	2	0	1	1	2	14
	[将来]	1	2	0	0	2	2	0	0	0	7
	一次的欲求	1	1	1	0	1	1	1	1	2	8
	二次的欲求	3	2	1	2	2	1	1	1	4	16
子	[過去]	N=11			N=2	N=3		N=3		N=4	合計
	一次的欲求	2			1	1		0		0	7
	二次的欲求	10			0	2		2		2	8
	三次的欲求	4			1	2		0		1	16
	[現在]	5			2	0		1		0	4
	一次的欲求	8			0	2		2		4	18
	二次的欲求	10			0	3		1		1	8
	[将来]	1			1	1		1		0	8
	一次的欲求	2			0	1		1		3	15
女	二次的欲求	5			1	0		2		3	17
	三次的欲求	11			1	2		1		1	6
	子							0		4	21

注) マス内の数値は、各コントリクト型に属する者が、それぞれの運動欲求次元に對して回答した合計値である。
なお、1人が1次と3次の両欲求を回答したものも含まれている。

れているといえよう。将来は一次=5、二次=6、三次=21で、「生きているのは、運動・スポーツができるから」とでもいわないばかりの結果である。

女子の場合、被面接者が運動経験豊かな自覚人間を多く含んでいるため、このような結果を招いたともいえるが、しかし、表6を見てもわかるとおり、現在運動をやっていない人たちの運動欲求においても、同様な傾向がある。生物学的生存欲求から社会的生存欲求を経て、自己確立に最も関係した文化的生存欲求へ志向するのは、人間の性質かもわからない。「必要」的欲求レベルの健康・体力プログラムを企画する指導者、ならびに管理者・コーチなどは、プログラムを余程変化に富んだ自由度の大きい内容にしないかぎり、「これが社会体育か」とゴロ寝をきめこまれる可能性は多い。

生理的欲求から始まった朝の軽い歩行が、単なる町内めぐりでは満足できず、同好の志を集めて競歩を始めたり、生物学的機構に挑戦をしかねないマラソンへと変化した例はいくらもある。社会体育は、運動という個人と密接な関係をもつ内容をどう社会的レベルで位置づけるかということであろうが、この動機の変化に即応した環境条件や主体的条件がます必要になると思われる。

多くの社会人がもっているであろう、このような非効用的生存欲求が、個人の努力で満足できる状況は、残念ながらわが国にはない。その実践的ストラテジーを少し考えてみることにする。その前に、表6で示された男女の欲求内容の具体例を提示しておく。

〔表6における男女の欲求内容の具体例〕

(一次的欲求：生物的生存欲求)

ストレスの解消、健康の保持、老化の防止、運動が好きだから、気分転換、体調を整える、体力づくり。

(二次的欲求：社会的生存欲求)

家族と一緒に楽しむ、友人との競争心、後輩に技術の伝達、試合での人間関係、仲間にはめてもらう、クラブで指導を受けたい、先輩・両親の影響、職場の仲間づくり。

P.T.A活動の中でのバレーボール参加、チーム・プレーの楽しさ。

資格をとりたい、クラブ存続のためのリーダー。上級生の勧誘、息子の教育のためのスポーツ、美容のため。

(三次的欲求：文化的生存欲求)

自己認識、技術が上達したい、運動を日常生活に生かす。

自分の楽しみとして一生やりたい、やる気の持続。

余暇活動としてのスポーツ、充実した練習をしたい、

自分自身の成長のために、どんなことでもきちんと教わる。

自己とのたたかい、自己の限界への挑戦、スポーツの楽しさに主眼をおく、自然に帰りたい、自己ペースでやりたい。

クラブを強くしたい。

(4) コンフリクトの型と動機づけの主体的要因と客体的要因

これまで、社会人の運動欲求と実現行動との一致・不一致ということから、各人のコンフリクトの型を操作的に決め、彼らの不一致を如何にすれば均衡させることができるかについて、手がかりらしい情報を得ようと努めた。しかし、これといった決定的情報は提示できなかった。

そこで、この手落ち部分を補う目的で、次のような問題を考えてみることにする。

すなわち、コンフリクトの高い人や消極的な満足に安住している人たちに提供できる動機づけ要因としては、どのようなものがあるかを検討することである。

これを行なうにあたって、まず動機づけの客体的要因（施設、指導者、時間的余裕、プログラムなど）と主体的要因（運動欲求の階層性）の面から考察することにする。

そして、この考察から抽出されたいいくつかの要因について、それぞれの重要性（欲求が満足せられるために大切な要因）を考慮することによって、各々のコンフリクト型に対応した、葛藤低減戦略の試みを示すこととする。

まず最初に、主体的条件として運動欲求の階層性を選び、他方、客体的条件として、次の10項目を選択した。

表7 コンフリクトの型と運動・スポーツに関する主体的・客体要因の分析

性 コンフリクトの強度 コンフリクトの型 被面接者数	男								子	
	低コンフリクト (満足)			中コンフリクト (満足+不満足)				高コンフリクト (不満足)		
	(I・V)	(I・V)・(IV)	IX	(I・V)・(II) III・IV・VI	(I・V)・(VII・VIII)	(VII・VIII)・ (IX)	(II・III・IV) VI	(II・III・IV) (VII・VIII)	(VII・VIII)	
	I, Q, T, X, Y	G, L, N, O	W,	B, M,	A, C, S, V,	D, R, U	H,		E, F, J, K, P,	
(1) 運動不足・ストレス解消	※ 5(5)	※ 3(4)	※ 1(1)	1(0)	※ 2(3)	0(0)	0(0)		0(1)	
(2) 健康・体力の保持増進	※ 4(5)	※ 3(4)	※ 1(1)	※ 1(2)	※ 3(3)	0(0)	0(1)		1(1)	
(3) 一定時間の運動	※ 4(4)	※ 4(4)	※ 1(1)	※ 1(2)	※ 3(3)	0(0)	0(1)		0(0)	
(4) 食欲増進	1(4)	1(2)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)		0(0)	
(5) よく眠りたい	1(2)	0(1)	0(0)	0(2)	※ 2(4)	0(1)	0(0)		0(0)	
(6) 気分転換	※ 4(5)	1(4)	0(1)	1(1)	※ 3(4)	0(0)	0(0)		0(0)	
(7) 身体を動かすのが好き	※ 3(4)	※ 3(4)	0(1)	※ 2(2)	※ 2(3)	1(1)	0(1)		0(0)	
(8) 体力維持の歩行	※ 4(4)	1(1)	※ 1(1)	※ 1(2)	※ 3(3)	※ 2(2)	0(1)		※ 3(4)	
(9) 異性とのスポーツ	1(1)	0(3)	0(0)	※ 1(2)	1(1)	0(1)	0(0)		0(0)	
(10) 休日の運動・スポーツ	※ 4(4)	※ 3(3)	0(0)	1(1)	0(1)	0(0)	0(1)		0(0)	
一次的(生理的)欲求	31(38)	19(30)	4(6)	9(14)	20(26)	3(5)	0(5)		4(6)	
(11) 家族全員で楽しむ	2(3)	1(2)	※ 1(1)	1(1)	0(1)	0(0)	0(1)		0(0)	
(12) 友人を得たい	※ 2(4)	1(3)	0(0)	※ 1(2)	0(1)	0(1)	0(1)		0(1)	
(13) 良い施設や指導者	※ 3(3)	0(2)	0(0)	0(1)	1(1)	0(0)	0(0)		0(0)	
(14) 良いのため	0(1)	0(2)	0(0)	0(1)	0(0)	0(0)	0(0)		0(0)	
(15) 競争心の満足	1(1)	0(1)	0(0)	0(1)	0(0)	0(0)	0(0)		0(0)	
(16) 他人からの承認	0(0)	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)	0(0)	0(0)		0(0)	
(17) 人間関係や交際	※ 5(5)	1(2)	0(0)	0(2)	1(1)	0(1)	0(0)		0(0)	
(18) リーダーになりたい	1(2)	0(1)	0(0)	0(1)	0(0)	0(0)	0(1)		0(0)	
(19) 運動・スポーツと仕事の両立	※ 4(4)	0(3)	0(1)	※ 1(2)	1(3)	0(0)	0(1)		0(1)	
(20) スポーツクラブに入りたい	※ 3(3)	※ 3(4)	0(0)	1(1)	※ 2(3)	0(0)	0(0)		0(0)	
二次的(社会的)欲求	22(26)	6(20)	1(2)	4(13)	5(10)	0(3)	0(3)		0(2)	
(21) 余暇の善用	※ 5(5)	1(3)	0(1)	※ 1(2)	0(1)	0(0)	0(1)		0(0)	
(22) スポーツ技能の向上	※ 4(5)	※ 2(4)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(1)		0(1)	
(23) 人格形成や精神力	1(3)	0(1)	0(0)	0(2)	0(2)	0(0)	0(1)		0(0)	
(24) 成しとげたあととの満足感	※ 3(4)	1(2)	0(0)	0(1)	0(2)	0(1)	0(1)		0(0)	
(25) 計画性を身につける	0(5)	0(0)	0(0)	0(1)	0(1)	0(0)	0(1)		0(0)	
(26) 自信や決断力を養成	※ 3(5)	0(0)	0(0)	0(2)	0(1)	0(0)	0(1)		0(0)	
(27) いろいろな運動を自発的に	2(2)	※ 2(3)	0(1)	※ 2(2)	※ 2(4)	0(1)	0(1)		0(0)	
(28) 自己を知るため	1(5)	1(1)	0(0)	0(2)	1(3)	0(0)	0(0)		0(0)	
(29) 生きがいのため	※ 3(4)	※ 2(3)	0(1)	1(1)	2(2)	0(0)	0(0)		0(0)	
(30) 自己のベストを尽す	※ 4(4)	1(3)	0(0)	0(2)	1(2)	0(0)	0(0)		0(2)	
三次的(自我的)欲求	26(42)	10(20)	0(3)	5(16)	6(17)	0(2)	0(7)		0(3)	
注 ¹⁾ 主体的条件										
(31) 運動・スポーツ施設	※ 4	※ 4	0	※ 2	※ 4	※ 3	※ 1		※ 5	
(32) 指導者及びプログラム	※ 3	0	0	1	1	0	0		0	
(33) 給与	※ 3	※ 3	0	1	2	2	※ 1		1	
(34) 時間的余裕	※ 3	※ 3	0	※ 2	2	1	0		※ 5	
(35) 友人関係	2	※ 3	0	※ 2	2	※ 3	0		※ 3	
(36) 家庭環境	※ 4	1	※ 1	1	1	1	※ 1		2	
(37) 学校環境	0	0	※ 1	※ 2	1	※ 3	※ 1		2	
(38) 地域の運動環境	1	1	※ 1	0	0	1	※ 1		0	
(39) マス・コミ関係	※ 3	2	※ 1	0	2	2	※ 1		1	
(40) 職業(労働条件)	※ 4	※ 3	0	1	1	※ 3	※ 1		1	
注 ²⁾ 客体的条件	27	20	4	12	16	19	7		20	

注¹⁾ 主体的条件(動機づけ要因)のマス内の数値はコンフリクト型のI型に回答した頻数であり、
()内の数値は、I型、II型、IV型、V型に回答した頻数である。

※印は各コンフリクト型において、著しい特徴を示す要因を表わしている。

注²⁾ 客体的条件の各要因の内、次の要因は下記のような区別、および意味からとらえられている。

(31)運動・スポーツ施設：地域の身近ではなく、職場とか地域外の施設。

(33)給与は職業を判断の基準においた。(主婦の場合は夫の職業から推測)

(40)職業(労働条件)は手のかからない子どもをもつ主婦、軽事務、教師などを満足な労働条件とした。

表8 コンフリクトの型と運動・スポーツに関する主体的・客体的要因の分析

要 因	性		女 子					
	低コンフリクト (満足)			中コンフリクト (満足+不満足)			高コンフリクト (不満足)	
	(I・V)	(I・V)・ (IX)	(IX)	(I・V)・(II) ・(III・IV・VI)	(I・V)・(VII・VIII) ・(II・III・IV・VI)・(IX)	(VII・VIII) ・(IX)	(II・III・ IV・VI)・(II・III・V・ VI)・(VII・VIII)	(VII・VIII)
	ク, ケ, コ, サ セ, タ, チ, ト ナ, ニ, ヌ		ウ, エ	カ, キ, ソ			イ, シ, ス	
(1) 運動不足・ストレス解消	※11(1)		0(0)	※ 2(3)			1(2)	
(2) 健康・体力の保持増進	※11(1)		0(0)	※ 3(3)			0(2)	
(3) 一定時間の運動	※10(1)		0(0)	※ 3(3)			1(1)	
(4) 食欲増進	1(8)		0(0)	0(1)			0(0)	
(5) よく眠りたい	2(8)		0(0)	0(3)			0(1)	
(6) 気分転換	※10(1)		0(0)	※ 3(3)			0(2)	
(7) 身体を動かすのが好き	※11(1)		0(0)	※ 3(3)			1(1)	
(8) 体力維持の歩行	※ 8(10)		※ 2(2)	※ 2(2)			※ 3(3)	※ 3(4)
(9) 異性とのスポーツ	1(5)		0(0)	0(0)			0(1)	0(1)
(10) 休日の運動・スポーツ	※ 9(10)		0(0)	0(1)			0(1)	0(0)
一次的(生理的)欲求	74(96)		2(2)	16(22)			6(14)	6(12)
(11) 家族全員で楽しむ	※ 8(10)		0(0)	1(1)			0(0)	0(0)
(12) 友人を得たい	※10(1)		0(0)	※ 1(3)			0(0)	0(0)
(13) 良い施設や指導者	※ 9(1)		0(0)	0(3)			0(0)	1(1)
(14) 美容のため	3(9)		0(0)	0(2)			0(1)	0(0)
(15) 競争心の満足	2(6)		0(0)	0(0)			0(0)	0(0)
(16) 他人からの承認	1(8)		0(0)	0(0)			0(0)	0(2)
(17) 人間関係や交際	※ 7(11)		0(0)	※ 1(3)			0(1)	0(0)
(18) リーダーになりたい	1(6)		0(0)	0(0)			0(0)	0(0)
(19) 運動・スポーツと仕事の両立	※ 9(11)		0(0)	※ 2(3)			0(2)	0(1)
(20) スポーツクラブに入りたい	※11(11)		0(0)	1(1)			0(0)	0(0)
二次的(社会的)欲求	61(94)		0(0)	6(16)			0(4)	1(4)
(21) 余暇の善用	※11(11)		1(1)	1(2)			0(1)	1(1)
(22) スポーツ技能の向上	※ 9(11)		0(0)	1(2)			0(0)	0(0)
(23) 人格形成や精神力	※10(11)		0(0)	1(2)			0(0)	1(1)
(24) 成しとげたあとの満足感	※11(11)		0(0)	0(3)			0(0)	0(1)
(25) 計画性を身につける	※ 7(11)		0(0)	※ 1(3)			0(0)	0(1)
(26) 自信や決断力を養成	※ 7(11)		0(0)	※ 2(3)			0(0)	0(0)
(27) いろいろな運動を自発的	※ 8(9)		0(0)	0(2)			0(0)	0(1)
(28) 自己を知るため	※ 9(11)		0(0)	1(2)			0(1)	0(0)
(29) 生きがいのため	※ 9(11)		0(0)	0(1)			0(0)	0(0)
(30) 自己のベストを尽す	※11(11)		0(0)	※ 2(3)			0(0)	1(2)
三次的(自我的)欲求	92(108)		1(1)	9(20)			0(2)	3(7)
注 ¹⁾ 主体的条件								
(31) 運動・スポーツ施設	※11		※ 2	※ 3			※ 2	2
(32) 指導者及びプログラム	※ 8		0	※ 2			1	0
(33) 給与	6		0	1			※ 2	2
(34) 時間的余裕	※ 7		0	※ 3			0	※ 3
(35) 友人関係	5		0	0			※ 2	※ 3
(36) 家庭環境	※ 8		1	※ 3			1	※ 4
(37) 学校環境	4		0	※ 3			1	2
(38) 地域の運動環境	3		0	0			0	1
(39) マスコミ関係	※ 8		0	1			1	※ 3
(40) 職業(労働条件)	※ 7		※ 2	※ 3			※ 3	※ 3
注 ²⁾ 客体的条件	67		5	19			13	23

注¹⁾ 主体的条件(動機づけ要因)のマス内の数値はコンフリクト型のI型に回答した頻数であり、()内の数値は、I型、II型、IV型、V型に回答した頻数である。

※印は各コンフリクト型において、著しい特徴を表す要因を表わしている。

注²⁾ 客体的条件の各要因の内で、次の要因は下記のような区別、および意味からとらえられている。

(31)運動・スポーツ施設：地域の身近ではなく、職場とか地域外の施設。

(33)給与は職業を判断の基準において。(主婦の場合は夫の職業から推測)

(40)職業(労働条件)は手のかからない子どもをもつ主婦、軽事務、教師などを満足な労働条件とした。

その10項目とは、(1)運動・スポーツ施設、(2)指導者及びプログラム、(3)給与、(4)時間的余裕、(5)友人関係、(6)家庭環境、(7)学校環境、(8)地域の運動環境、(9)マスコミ関係、(10)職業(労働条件)である。

この客体的条件は、面接におけるチェックリスト内の社会的要因の質問項目から、検討を加えるために情報を集めたものである。この詳細で具体的な説明は表7と表8に示してあるので参考願いたい。

さて、この2大要因にたいして、低コンフリクト(満足)、中コンフリクト(満足+不満足の混合)、高コンフリクト(不満足)の区分を設けて、それらの各コンフリクトの型に属する者が、諸要因にたいして示した満足経験の頻度を分析した。

さらに、各要因において、満足・不満足経験の特徴を分析するだけでは、「その結果がただちに運動・スポーツへの動機づけの次元に転化できるとは思われない」¹⁷⁾ので、満足経験と不満足経験の特徴をもつ、すべてのコンフリクトの型の者が、その際に運動欲求と運動行動の一一致・不一致がどうであったかを明らかにしなければならなかった。

したがって、表7と表8における数値は、(I)型の列と(I型、II型、IV型、V型)の列の両方が示されている。運動・スポーツを、やろうと思って、実際にできたタイプの数が示されているということである。

男子で積極的動機要因として考えられるものは、まず共通的には、「体力維持の歩行」だけである。各コンフリクトの型にもとづいて検討すると、I・V型の者では、「運動不足・ストレスの解消」「健康・体力の保持増進」「一定時間の運動」「気分転換」「身体を動かすのが好き」「体力維持の歩行」「休日の運動・スポーツ」「友人を得たい」「良い施設や指導者」「人間関係や交際」「運動・スポーツと仕事の両立」「スポーツクラブに入りたい」「余暇の善用」「スポーツ技能の向上」「成しとげたあとの満足感」「自信や決断力を養成」「生きがいのため」「いろいろな運動を自発的に」「自己のベストを尽す」など計21コの動機要因があげられている。

また、IX型の者は、「家族全員で楽しむ」を積

極的動機要因として考えている。

VII・VIII型の者は、「体力維持の歩行」を自己の運動に対する動機要因として考えている。それにしても、運動実施者と運動非実施者とでは、有効な動機要因として考えている数に相当の差が認められる。被面接者の数が少いし、コンフリクトの型へ所属する人数も一樣でないので決論的表現はさけるが、その特徴はよくわかると思う。(I・V)、(II・III・IV・VI)型と(VII・VIII)型を比較することことは明らかであろう。

客体的条件については、まず共通して積極的動機づけ要因とみなせるものは、「運動・スポーツ施設」(これは特殊で、一般人は使用にくい条件下にあるもの、つまり大学・学校・職場などの施設をさす)「友人関係」「時間的余裕」「学校環境」「労働条件」などであり、「指導者やプログラム」はあまり動機づけ要因としては機能を果していない。

運動・スポーツをやるために客体的条件は、しばしば、「友人」「施設」「ひま」「金」といわれるが、「指導者」が欠けているのは、指導者不足を反映しているのかもわからない。

女子に視点を変えて表8をみると、まず共通的なものとしては、男子と同様「体力維持の歩行」であった。これは、男女とも、コンフリクトの型になく、動機要因として有効であり、また充足が容易であることを物語っている。

コンフリクトの型にもとづいて検討するとI・V型では、特に「非効用的生存の欲求」である三次欲求すべてが運動・スポーツをやる時の重要な動機づけ要因と考えられている。。

また(I・V)型と(II・III・IV・VI)型は、一次的欲求で同じ傾向を示している。※印のついた要因は、すべて積極的な動機要因として考えられるものである。

やりたくてできない型では、やはり一次的欲求が支配的であった。

客体的条件では、共通的な特徴として、「運動・スポーツ施設」「時間的余裕」「労働条件」であり、I・V型では、特に「友人関係」「給与」「学校環境」「地域の環境施設」などすべてマイナス要因である。

ここにおいても、運動経験者には、自己ペースの運動欲求が効果をもつ動機づけとなることを示唆しているし、とくに民間の公営運動・スポーツ施設をもっと入りやすく身近かなものにしなければならないことがわかる。

女子の場合、運動のよくできる人たちには非効用的生存への欲求を満足するように動機づけ、できない人たちには、「体力維持の歩行」をすすめることが良策と思われる。

客体的条件で、I・V型の人の積極的動機づけ要因としては、「運動・スポーツ施設」「指導者及びプログラム」「時間的余裕」「家庭環境」「マス・コミ関係」「労働条件」などがあげられる。スポーツ・クラブに入って活動している人たちにとっては、これらの客体的条件が満足していないと運動・スポーツが不可能になると、これらの条件から読みとれる。

逆に、運動をやりたくても、できない人では、「家庭環境」「運動・スポーツ施設」「時間的余裕」「友人関係」などを動機づけ要因として利用することが可能である。

ここで男女とも、また運動をやっている人、やっていない人を問わず、共通して「運動・スポーツ施設」を動機づけ要因としてあげているが、これは恐らく面接の内容から考えると、その施設が近くにあるという「心丈夫」という意味であって、決して十分に活用しているという意味は薄いと思われる。富士山の近くに住んで「いつでも登れる」からと思って、なかなか実行しない人に似ている。

このような要因分析から、ある程度、異なったコンフリクトをもっている人々を如何に動機づけたらよいかという問題への手がかりを得ることができよう。

さて、では、この主体的要因と客体的要因のどちらを優先的に考えれば、人々はグランドに姿を見せるようになるだろうか。わが国におけるこの両要因の使い分けの悪さには、いろんな問題事態で出会う機会が多いので、経験的事実の積上げは各界においてめざましいものがあると思われる。

皮肉でなく、これらの問題をとりあげれば次のように要約できよう。

「運動やスポーツが実行されないのは、施設や

指導者といった客体的条件が不満足だからか、それとも、やる気に関係した主体的条件が充分でないのか、それとも両方か」といった問題である。

この問題を考えるには、次のことから始めるのがよかろう。

物事の進歩には少くとも2通りのやり方がある。(1)いくつかの経験をもとにして将来を予測し、将来的な観点から計画を立て、そのプランによって現実を制御・改善していくやり方。(2)(1)の結果を待って、良い結果であれば模倣し、悪ければやらない現実処理型。大きくは2つに分けられるのが普通であるが、もっと始末の悪いのは、問題点もよく理解でき、それらに対する方法もある程度有効性が認められているのに実行に移さず、国民レベルの苦情（世論）の高まりで、やっと腰を上げ、しかも他人まかせで実施するやり方がある。これは、世にも名高い「後追い行政」というものに、その特徴が著しい。これらの進歩のやり方と、ここで問題にしている運動・スポーツの客体的条件・主体的条件との間に何らかの関係を見出せないだろうか。

つまり、(1)の予測・計画的戦略は、まず客体的要因を整えておいて、それから、主体的条件を満足させる戦略に關係し、(2)の現実処理的・後追い戦略は、最初に、主体的条件を問題にし、どうにもならなくなつてから客体的要因を整備・調整する戦略に關係していると考えられる。

この報告書は、どちらかというと(2)に近いかもしれない。多くの標本から、現在の運動欲求を集めて、統計的に処理し、その主体的条件の満足・不満足から、施設や指導者や金や運動处方を考えてみようとしているのではなかろうか。これから社会の状況と、新しい人間像をもとに、人間の基本的欲求を満足させるには、どのような客体的条件が必要かといった研究が一方では望まれる。まず計画的客体条件があり、そこで主体の多様な欲求を自由に充足させる図式が理想といえる。その関係を図示すれば、図3のようになるだろう。運動・スポーツ欲求の満足にはまず、施設や指導者や運動プログラムが多様に社会で用意されるとする。この場合、それに対して、満足する人とまだこれでは自分の欲求に適さないという理由で不

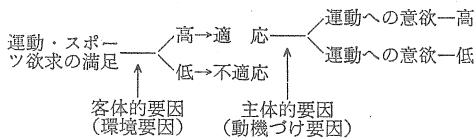


図3 運動・スポーツ欲求の満足と客体的要因、動機づけ要因との関連（鈴木¹⁸⁾の考え方を参考にした）

満足になる人が生じる。しかし、後者の場合、計画がしっかりとすれば、その数は少ないと予想される。客体的要因に満足した人々は、その要因で満足させることができそうな運動欲求を多様に自由に発揮される人は運動意欲は高まり、もしその時点で、動機づけ要因の適切なアドバイスがない場合は、運動意欲は低下する。この人たちへのアドバイスに必要な情報が、この種の研究の意義ある点であるが、その他にも有効な動機づけは考えられよう。

これと反対に、客体的要因が後で、主体的要因が最初に動機づけられる場合を考えてみよう。この方向での行動始発は、わが国では日常的なものである。

客体的要因がとぼしい時点で、主体的要因ばかりが強調されるということは、つまり「やる気」ばかりが上から押しつけられ、「施設はなくても運動する気さえあれば、どこでだってできる」とか「指導者などをあてにしていては、いつまでたっても一人前にはなれない。自分一人で頑張って、工夫してやること」といった文句が日夜彼の頭上めがけて飛びかうということである。

あげくの果てには、数名の中の勇敢にして頑張る1人を道徳的観点から祭り上げて、その英雄に追従させようとするパターンを作りあげ、まさに「楽しくない」運動・スポーツ経験することになる。

わが国のレクリエーション活動を考えるとこの辺の事情は、より一層明確に理解できよう。「自然に帰れ」「旅は未知の何かを知らせてくれる」「楽しい夜のキャンプは人間性の回復だ」などといった文句で、レクリエーション活動の活動水準を上げられ、山や海に行くと、水道・火・便所・宿泊などの施設は貧弱との上ない。あるのは、「……するべからず」の道徳教育である。これで

は、余暇活動が低下するのは当然である。もし、ここで、客体的条件が整っていればどうだろう。個人は自己の欲求だけに注意を向け、自由な欲求拡大をはかりうることができる。わが国の運動・スポーツが倫理的意味あいが濃いといわれるところなるらばこれらのこと吟味してみる必要がある。

主体的条件→客体的条件の戦略で日夜トレーニングをすると、わが国特有の「スポーツの仮面性」をもったスポーツ人間が生じる傾向がある。この「スポーツの仮面性」というのは、施設や学校体育の指導者などに不満があるにもかかわらず、スポーツの価値（抽象的・主観的満足感）は高いものをもっている人のことである。これは、大企業の社員などにも時々見受けられる企業側から見た“ありがたい”人達である。

このようなことは、社会体育の推進には非常に重要な内容となる。わが国の運動・スポーツ施設は、大部分が学校と民間企業で占められている。ところが、多くの社会人は、自己の運動欲求と非常に関連性をもった客体的条件がないために、いくつかの満足感は「一時的現象として、比較的早期に消失する」¹⁷⁾ことがわかっている。社会人の運動・スポーツ種目が比較的早くとりかえられることを考えるうなずけることである。

ところが、さらに問題なのは、まるっきり施設や指導者がない状態に長期間放置されることである。この状態の下では、多くの人々をして、慢性的不満足状態の「客体的条件の追求者」とならしめるのである。ここにおいて、もし、「安あがり」で「生存に必要な」社会体育をめざすのであるなら、これまでの諸点を考えた上で最初からやらない方がよかろう。

社会人にたいする運動・スポーツに関する動機づけにおいては、まず、客体的要因があつて、それから主体的要因の動機づけをする方が、人間の欲求の発展に矛盾しないと考えられる。

（5）コンフリクトの解決様式のモデル

これまでの考察から、随分と独断的な考えを述べて来たと思うが、ここで一応、コンフリクトの型に対する解決様式の単純モデルを提示しておこう。

図4は、客体的要因と主体的要因の動機づけをそれぞれのコンフリクトの型に関係づけながら解決をはかろうと企図したものである。

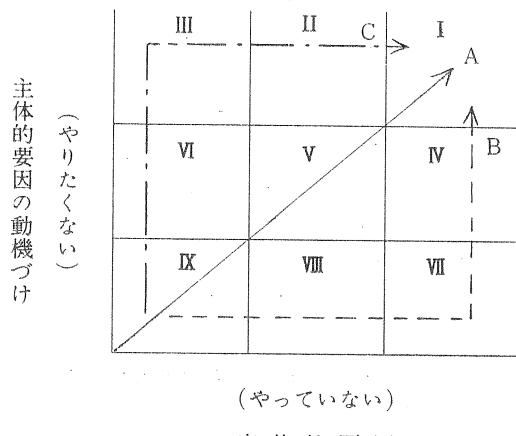


図4 客体的要因—主体的要因のコンフリクト
解決様式のモデル

Aの矢印は(IX)→(V)→(I)でコンフリクトはどれもないのであるが、IXはやりたくないやっているという、いわば無関心タイプのものである。VとIは社会人としては文句はないところであるが、このAに關係した3つのタイプは、客体的要因と主体的要因を同時提示しながら、それぞれのレベルをAに向けることが望ましい。現実問題として、I型よりもV型の「時々やりたくない一時々やっている」型が最も日常的に社会人向きで、心理的にも生理的にも最も安定しているのではないかと思われる。このV型が運動欲求の質的に高いものを選択的に充足すれば、これが理想的だろう。

I型は、スポーツ・クラブとか選手とかいった人がこれに相当するので、充実もするが緊張も相当な型である。しかし、非効用的生存欲求を最も望むタイプであるから、運動・スポーツの欲求の体系化を科学的に提示する必要がある。

Bの矢印は(IX)→VII→VIII→IV→(I)という方向で不一致を一致させる必要があるタイプである。この方向に属するものは、運動・スポーツはやりたいが、できないというものである。社会人の大多数がこのコンフリクトの型に属する傾向がある。このコンフリクトの型に対しては、主として客体

的条件の情報を流して、動機づけるのが良いと思われる。

とくにVIIとVIII型は、時間的余裕と施設・仲間があれば、何んとか動き出るタイプである。そのためにも、手近に使用手続きの簡単な施設を提供する必要がある。

Cの矢印は(IX)→VI→III→II→(I)という不一致型の解決ルートである。この型は、この報告書の中でもふれたとおり、やりたくないのに運動をしかたなくやっている型である。

このコンフリクトの型の解決には、特に主体的要因の動機づけが有効と思われる。ここで、注意すべきは、「やりたくない」ということは、直接運動ができないことを連想させるが、実際は運動・スポーツを平均以上にやっている可能性が高いとみなされる。なぜなら能力が低ければ、IX型へ直行するが、能力があるために、他人から誘われることが多いからである。このタイプのコンフリクトの解決には、とくに、社会的欲求の動機づけは、敬遠される。そういう点から一次と三次の欲求をうまく操作して提示する必要がある。

そして、本来の意味から「やる気」を起させるには、つぎの三つのレベルを注意深く演出することが必要である¹⁹⁾。

第一は関心の問題で、その運動・スポーツをおもしろく感じた時に、やる気が高まるという原則である。このコンフリクトの人たちは、運動・スポーツそのものを拒否している人たちと、それを一緒にやる他人との関係を拒否している人たちが含まれる。前者の人の場合は少々やっかいであるが、後者は第一の関心の程度をうまく操作できる可能性は十分にある。

第二は理解の問題で、ある運動を行う目的の意義がよく理解され、その目的追求の方法がわかっている時は、やる気が生じるということがらである。III・VI型は、どうもこれがあいまいなところがある。

第三は所属性の問題であり、その目的追求にかかる仲間と、自分とのかかわり方の問題で、その集団の中心者になる時やる気が生じるという考え方である。

これらのモデルは、それぞれのコンフリクト型

の特性を詳細に分析することから漸次改善されると思われるが、これに加えて、人間の情報処理行動とコンフリクトの関係も考えておく必要がある。なぜなら、われわれの行動には何らかの認知的行動の標準があり、それからの入力とのズレを調整することにより、環境に適応している。いま、個人内にこの標準とのズレ（不一致）が生じた場合、これを低減させるために活動が始まり、そのズレをなくすための情報が収集されると考えられる。この不一致を低減させる情報が何かを研究しなければならない。さらに、人間は、このような標準と入力情報とのズレがあまりに大きいと不快を感じ、ズレが適当な場合は快と感じる傾向がある。

人間を非平衡の連続とみる立場からは、その個人にとっていつも快と感じられる不一致をなくさないことが重要であるともいえる。運動欲求の低次な欲求が満足されても、すぐに、より高次な欲求とより高い階層の不満足が生じるのである。満足というものを、欲求の停止と考えることは、人間を生物的次元にひきもどすことになる。

社会人の運動・スポーツ欲求は、どのような欲求が支配的で、それらはどのように充足されるべきかを、わずかな資料をもとに考えてきたが、十分なまとまりにならなかった。

最後に面接の結果得た情報を提供して、コンフリクト解決のための情報として利用願いたいと思う。

〔運動不足感が必ずしも運動を生じさせない理由〕

相手がいない、技術的能力が劣っていると主観的に判断してしまう。

時間的余裕がない、運動よりも他にやることがあるから。

仕事量が多い、組織がない、ゼイタクという気持。

指導者がいない、手軽にできない、無精だから。安易な方法を求めるから（テレビ・パチンコ）自覚がたりない、施設を借りる手順が複雑だから。

てれくさい、主人の理解がない。

〔やる気はどのような時に生ずるか〕

相手から誘われて、同じレベルの者が集った時。

「ああ、今日も運動したなあ」という満足感がある時→この次もと思う。

体調が良い時、うまくなりたい時。

気分転換したいと思った時。

心に余裕がある時、試合・大会という外的目標があった時。

うまいプレーを見た時、むしゃくしゃする時。

運動にあこがれた時、仕事で精神的に疲労した時、スケジュールに追われた時。

〔やる気はどのようにしたら持続できるか〕

身体に注意してコンディションを整える。

健康づくり、いやでも毎日やる、目的を明確にする。

人間の一番弱いところを克服するためにスケジュールを作る。

チームの和を保つこと、めんどうがらずに実行に移す。

試合への参加、新しいものを求める気質。

競争的なものを利用する、他の人がおぜん立てしてくれるよ。

仕事を中心とした生活に無理を与えないようにする。

家族と一緒に楽しむ。

仲間をつくってお互いに誘いあう。

興味本位をやめる。

IX. 要 約

わが国における社会人の運動・スポーツに関する動機の諸相を明らかにするために、面接調査を行なった。そして、人間の基本的欲求の階層性に注目しながら、はたして、社会人は、どのレベルの運動欲求をめざしているのかを明らかにするために、前回の報告書の結果を検討する中から、いくつかの仮設的提言を行ない、面接調査との対応を心がけた。

その結果、男女とも運動経験の豊富な者においては生物的生存欲求よりも、文化的（非効用的）生存欲求が強く表われ、運動経験の少ない者では、最初は生物的生存欲求が強く現在、および将来に對しては、やはり文化的生存欲求が強く望まれていることがわかった。

これらの結果は、社会人の「社会体育」を「必

要感」からだけの身体活動欲求に限定する考え方には反省を求める材料になると思われる。そして、そのことから、社会人を運動・スポーツに動機づけるには、人間の欲求の変化や多様さを十分考慮して行なわれる必要がある。

さらに、社会人の運動欲求と実際行動の一一致・不一致を問題としてとりあげ、これらのコンフリクトの型を決めながら、高コンフリクトを如何にして低減させるかの有効な情報を得るために、動機づけの客体的条件と主体的条件を検討した。そして、社会体育の最適方略は、客体的条件でまず満足させ、それから各人の運動欲求を満足させるように主体的条件を考える方が良好な結果を生む可能性が強いことが提示された。これらの結果を基礎にして、コンフリクトの解決様式の単純モデルを討論した。

それにしても、面接によるわずかな資料で複雑な問題を分析した感がある。この無秩序な報告書の中から、「社会体育」に有効な情報が選択され少しでも秩序のある組織化が行なわれれば幸いである。(執筆者；調枝孝治)

参考文献

- 1) 堀川直義 (1971)「面接の心理と技術」法政大学出版局。
- 2) 青山昌二、江川政成、嘉戸 優、調枝孝治、横山泰行 (1972) 「昭和47年度日本体育協会スポーツ科学研究報告、No. II社会体育の動機に関する調査第1報—アンケート調査—」日本体育協会スポーツ科学委員会。
- 3) A. H. マスロー著 早坂泰次郎訳 (1971) 「可能性の心理学」川島書店。
- 4) A. H. マスロー著 小口忠彦監訳 (1971) 「人間性の心理学」産業能率短期大学出版部。
- 5) 時実利彦 (1970) 「人間であること」岩波書店。
- 6) W. B. キャノン著 栖原六郎・大沢三千三訳 (1959) 「人体の叡智」創元社。
- 7) 真木悠介 (1969) 「人間的欲求の理論」展望, 11, 16-45.
- 8) ルネ・デュボス著 田多井吉之介訳 (1972) 「健康という幻想」紀伊国屋書店。
- 9) 菊地章夫 (1973) 「現代社会にみる意欲喪失」児童心理, 27巻・第10号, 33-40.
- 10) 坂野 登 (1973) 「意欲の発達心理学」児童心理, 27巻・第10号, 15-23.
- 11) フォン・ベルタランフィ著 長野 敬・太田邦昌訳 (1973) 「一般システム理論」みすず書房。
- 12) 玉野井芳郎 (1971) 「ポールディング・ブームの意味」エコノミスト, 2月号, 42-44.
- 13) Weber, C. O. (1949) 「Homeostasis and servomechanisms for what?」 Psychol. Rev., 56, 234-239.
- 14) 北村晴朗・安倍淳吉・黒田正典編 (1969) 「心理学研究法」誠信書房。
- 15) Worell, J. & Worell, L. (1965) 「Personality conflict, originality of response and recall」 J. consult. Psychol., 26, 55-62.
- 16) 浜 治世 (1972) 「実験異常心理学」誠信書房。
- 17) 角 隆司 (1972) 「労働における動機づけ要因」心評, 15巻, 26-42.
- 18) 鈴木武治 (1971) 「我国におけるモラール研究の動向と問題点」心評, 14巻, 259-307.
- 19) 片岡徳雄 (1973) 「意欲を育てる叱り方・ほめ方」児童心理, 27巻10号, 126-131.

